

覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文(一)

渡 邊 信 和

I はじめに

聖徳太子の伝記の研究は、漸く国文学の側からのアプローチがはじまったところである。とくに文保本太子伝⁽¹⁾と、その周辺に位置する幾つかの太子伝⁽²⁾、「聖法輪藏」などの本文⁽³⁾が、容易に目の届くところに活字化されたことと、中世南都の太子伝研究にかかわる一連の研究の成果は、中世に於ける信仰の対象としての聖徳太子像を説明するだけでなく、聖徳太子像の形成という、勝れて文学的な行為の解明にも資するところ大であった。こうした流れの中で求められるのは、より多くの未公開の聖徳太子伝記の公刊⁽⁴⁾である。

覚什の『聖徳太子伝記』もその一つであろう。幸いに西尾図書館岩瀬文庫の御許可を得て、翻刻並びに釈文を発表する運びとなった。

覚什『聖徳太子伝記』は『国書総目録』などを検するに三カ所に分載されており、しかもそれらの全てが同一の書物とは思いい難いところから、

覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文(一)

その現存点数も、成立も、著者覚什についても不明と言わざるを得ない。その成立の最下限を文明十九年と見るのは、根拠のないことではない。東京国立博物館に模写本として襲蔵されている『上宮太子伝記』⁽⁵⁾は、その奥書によれば、親本は法隆寺に蔵される文明十九年丁未中夏に禪阿なる人物の書写、校合したものであることがわかっているのだが、その本が太子七歳の条までは、覚什の『太子伝記』によったらしい事が知られているからである。また、かつて反町弘文荘から天理図書館に入った覚什『太子伝記』は、『弘文莊待賈古書目総索引』⁽⁶⁾によれば、伝承として、青蓮院門跡尊応准后の書写になるものとのことで、それが正しいとすれば、永正年間ころには既に写本が存在したことになる。それはあくとしても覚什『太子伝記』の成立は、文保本以降、文明写本以前の十四〜十五世紀、室町時代前半のものと言えよう。

翻刻に際してはこれらのうち最古本、若しくは最上本を底本とすべきであろうが、未確認のものも多く、判断を留保して西尾図書館岩瀬文庫本を底本とした。

註

(1) 「文保本太子伝」については、未翻刻の物が多い。「聖徳太子全集」第三巻に翻醒寺蔵の抄出本が有るのみである。日光輪王寺蔵本等の翻刻が待たれる。牧野和夫によれば、彰考館蔵写本（抜書）、身延文庫蔵写本、瓦屋禅寺蔵写本など幾つかの文保本太子伝の存在が確認されたようである。それらの一日も早い公刊を鶴首するところである。

(2) 小島恵昭・渡辺 共同研究「万徳寺蔵『聖徳太子伝』翻刻」（本紀要・第二号・一九八〇）、牧野和夫「新出聖徳太子伝二種」（『斯道文庫論集』第二〇輯・一九八三）

(3) 川口久雄「越前丹生郡法雲寺所蔵『道士勝負記』とその絵解について」（『金沢大学法文学部論集 文学編』二二・一九七四）、同「正法輪蔵」（『日本庶民文化史料集成』第二巻・三書房・一九七四）、平松令三「聖法輪蔵」（『真宗史料集成』第四巻・同朋社・一九八二）、阿部泰郎「『正法輪蔵』東大寺図書館本」（『芸能史研究』第八二号・一九八三）、牧野和夫（慶応義塾図書館蔵『聖徳太子伝正法輪』翻印並びに解説）（『東横国文学』第一六号・一九八四）及び、渡辺「浄勝寺丹山文庫蔵『正法輪蔵』研究並びに翻刻」（本紀要・第七・八合併号・一九八六）

(4) 阿部泰郎「中世太子伝の伎楽伝来説話——中世芸能の縁起叙述をめぐりて——」（『芸能史研究』第七八号・一九八二）、同「聖徳太子伝——中世太子伝『正法輪蔵』の輪郭——」（『国文学解釈と鑑賞』第五一卷九号・一九八六・九）、牧野和夫「中世の太子伝を通して見た一、二の問題（一）」（『東横国文学』第一三三号・一九八八）、同「中世の太子伝を通して見た一、二の問題（二）」（『東横国文学』第一四四号・一九八八）、同「中世の学問（注釈）の一隅」（『日本文学』第三十三号・一九八四・四）、黒田彰「都憑覚書き——太子伝との関連——」（『国語国文』第五七巻第五号・一九八八）など、渡辺にも「聖徳太子伝」の日羅渡来説話について——『聖法輪蔵』を中心に——（『中京国文学』第六号・一九八七）、「聖徳太子伝における芹摘姫説話について」（本紀要・第九号・一九八七）がある。

(5) 牧野和夫による寛文版本の翻刻（三弥井書店・伝承文学資料集成）や、かつて、大量の聖徳太子伝類を調査した慶応義塾附属研究所斯道文庫の校本の製作作業など期待されることは多い。

(6) 拙稿「寛斤著『聖徳太子伝記』序文について」（『説話』第八号・一九八八）の註1に整理したが、『聖徳太子伝記』とする項目は二つあり、そのいづれものの中に、寛什の『聖徳太子伝記』と目されるものと、そうでなさそうなものとが記録されてある。岩瀬文庫の異本「聖徳太子本地」はまた別の項となっている。阿部隆一の「室町時代以前成立聖徳太子伝記類書誌」（『聖徳太子論集』平楽寺書店・一九七二）や、小倉豊文「聖徳太子と聖徳太子信仰」（『綜芸社』一九七二）に検しても不明である。「国文学解釈と鑑賞」（第五一卷九号・一九八六・九）の「本朝祖師伝記目録」によれば、寛永二十二年の刊本が存在するようだが、阿部隆一の調査によってもその存在は確認されず、論者も確認にいたっていない。拙稿でも論じたが、寛什『太子伝記』の特質は、その「序文」にあるのであって、この部分が太子讃嘆表白になっていたり、或いは「序文」の後にそれが付されていたりするものは、既に寛什『太子伝記』とはみなしがたい。聖徳太子に対する認識が全く異なっているからである。

(7) 前掲阿部論文による。今は架蔵の『上宮太子伝記』紙焼写真によって検討する。同書下巻末に「文明十九年丁未中夏天書之同一校畢／愚筆禪阿／此一帖筆者者浄土□道□為形見者也／戊申四月三日 往生□案ノ」とあり。次丁に「右中院家伝来文明十九年之／古写本明治十九年八月班鳩／文庫寄付畢 永寺門外出ヲ禁ス 別当大僧正千早定朝」とある。此本の成立は当然文明十九（一四八七）年以前である。この本と寛什の『聖徳太子伝記』との前後関係は、必ずしも明確ではないが、もし、寛什の『太子伝記』に先行するとすれば、巻八以降と寛什の『太子伝記』との関係や、太子一歳の条の後半の寛什の『太子伝記』の文の不整合を説明しにくい。逆に『上宮太子伝記』が寛什の『太子伝記』を書写したとすれば序のあとの署名を落としていることの意味が明らかではない。いまは一応寛什の『太子

伝記」が先行したものと見る。

(8) 『弘文莊待賢古書目総索引』(八木書店・一九八八)では永正の写本として、伝尊応准后(青蓮院門跡)筆としているが、前述阿部論文は、近世初の物と判断している。写真に見るかぎりではその文字の様は阿部論文に從うのが妥当と思われる。反町引文莊の記述の根拠となった極札は疑義がある。

Ⅱ 著者覚什について

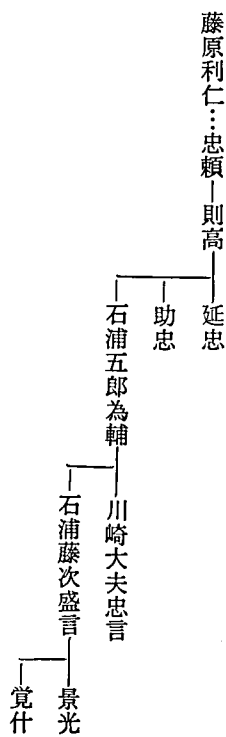
先にも触れたように著者覚什については殆ど分かっていることがない。それどころか、はたして覚什なのか、それとも覚斤なのか正しい名前とその訓みも明らかではない。論者もかつて論文の中で本書をとりあげる
とき、『覚斤太子伝』あるいは『覚斤太子伝記』と記述してきた。そのときは先行する先学の論述に従ったのである。それらの根拠は阿部隆一「室町時代以前成立聖徳太子伝記類書誌」の⁽¹⁾

本書の著者は一本は覚什に作り、一本は覚斤に作り、共に「遍照金剛遺弟」と冠する。「大日本仏家人名辞典」「密教大辞典」によれば、覚什は伊勢教王山第三代、法を済真に受けたと言え、平安中期の人である。しかし、本書には鎌倉時代文永等の記事があるからこの覚什ではない。同名異人か、或は覚斤が正しく、什と斤は字形が似ているから焉馬の結果、有名な覚什に間違われたか、後考を俟つ。本書の成立は室町末近世初と見るべきであらう。

覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文(一)

とする記述が要を得ているように思われる。『国書総目録』の記述では著者を覚什としているが、先に触れたようにその中に含まれる書籍が必ずしも同一のものとは限らない事もあって、論拠としにくかったこともあり、さらに拙稿でも少しく触れたところであるが、現存する写本に岩瀬文庫本は「遍照金剛遺弟⁽²⁾ 覚斤⁽²⁾」、神宮徴古館本は「遍照金剛遺弟⁽³⁾ 覚斤⁽³⁾」、岩瀬文庫蔵『異本聖徳太子の本地』は「へんせうこんかうゆいてゐ かくきん」、天理図書館本は「遍照金剛遺弟⁽⁴⁾ 覚斤⁽⁴⁾」としている、国会図書館蔵の十巻本でも「遍照金剛遺弟⁽⁵⁾ 覚斤⁽⁵⁾」とした「シウ」の上に「キン」と重書きをしているなど、総じて覚斤のほうが有力に思われるからであった。

その後『尊卑分脈』の索引で覚什の存在を見つけ、検討した結果、石浦藤次の子に比叡山の僧、少僧都北野別当覚什の存在を確認した。近しい者達の系図を左に引く。



さらにこの人物が曼殊院の門跡となつていふことをも知り得たのである。弘化二(一八四五)年刊の『門跡伝』によれば、少僧正であつた彼の前任の門跡は是心院関白二条師良の息で、応永十六(一四〇九)年天

台座主となった大僧正良順であり、彼の後任の門跡は成恩寺関白経嗣の息で永享三(一四三一)年に天台座主となり、長禄四(一四六〇)年に示寂した准三后良什であった。天台宗の僧であり、彼に比定すべきかどうかは更に追究すべきものであるが、さしあたっては彼を著者に擬しておく。

註

- (1) I項註6参照。
- (2) I項註6、拙稿「覚斤著『聖德太子伝記』序文について」
- (3) いづれも架蔵の紙焼写真による。
- (4) 卷二、三〇八ページ。肩に「山 少僧都北野別当」とする。
- (5) 昭和五十三年・文献出版の複製本による。

Ⅲ 底本について

底本とした岩瀬文庫蔵本の書誌は以下のようである。⁽¹⁾

- 一 所蔵 西尾市市立図書館岩瀬文庫 図書番号 3709/卯/66
- 一 写本 五冊
- 一 鳥の子紙、列帖綴 第一冊、第二冊、第五冊各五折、第三冊、第四冊各三折
- 一 寸法 縦二四、二cm×横一八、五cm
- 一 表紙 藍紙表紙

- 一 題簽 赤地の金霞み引き紙、「聖德太子伝記 一」(第一冊)等、第二冊は欠落。
- 一 奥書など 第一冊、第三冊、第五冊に本文とは別筆で「イカコヤトウオウ」とある。
- 一 一面半葉各十行 一行十三~十八字(字高一八、四cm)また対校に使った岩瀬文庫蔵の『異本聖德太子の本地』と題する覚斤『太子伝記』の書誌も以下に掲げる。⁽²⁾

- 一 所蔵 西尾市市立図書館岩瀬文庫 図書番号 6729/71/6
- 一 写本 五冊
- 一 楮紙、袋綴じ 第一冊、第二冊八一紙、第三冊六二紙、第四冊四六紙、第五冊八八紙
- 一 寸法 縦二八、〇cm×横二〇、〇cm
- 一 表紙 薄茶色網目紙表紙
- 一 題簽 黄土地葦鳥模様紙「聖德太子本地 二」(第二冊)等、第一冊、第四冊は後補。

- 一 奥書など 各冊表紙「共五」「祥寿」の朱書がある。
 - 一 一面半葉各八行 一行十三~十八字
- 他に対校に使った諸本の書誌については、国立東京博物館蔵『上宮太子伝記』、天理図書館本は入手した紙焼写真によったため確認していない。⁽³⁾『聖法輪蔵』諸本についてはそれぞれの翻刻本、万徳寺蔵『聖德太子伝』についても翻刻本を用いたのでその翻刻に付された書誌を参考せ

られたい。

註

- (1) 同朋学園佛教文化研究所の調査資料による。後、私に再調査を行った。
- (2) 1項註3。
- (3) 同前。

IV 第一冊に関するノート

章の配列について：底本及び天理図書館本では太子八歳の条に続けて「ないし所の事」とする章が挙げられている。神宮徴古館本、岩瀬文庫蔵『異本聖徳太子の本地』では章題は記されないものの、一として太子八歳の条に続けて書いている。日光輪王寺蔵の文保本『太子伝』でもこの位置にあるが、これが本来あるべきところであるかどうかは疑問である。むしろ太子十歳の条のなかに、敏達天皇が皇居を捨てて、鳳輦に乗り、内侍所の鏡と共に稲淵山に逃れたとする記述があるので、その後に掲載するのが良いと思われる。国会図書館蔵十巻本はその位置に載せているが、このことは国会図書館蔵十巻本の覚什本としての正しい本文を有することを意味するものではなく、寛文六年板『聖徳太子伝』との関係もあって、覚什著の『聖徳太子伝記』を整合した本文と見られる。「内侍所の事」の章が太子八歳の条に続けて載せられていることの意味は未だ解らない。後考に俟ちたい。(目次の項参照)

覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文(一)

金峯山飛行説話及び白馬寺などの記事について：金峯山飛行説話は広田哲通「唐土の吉野をさかのぼる——吉野・神仙・法華持者——」に整理されてある。そのうち関係するものを例示しておく。

伝云。当山は驚峰分即釈尊遊化勝地也。昔宣化天皇即位三年有難思靈瑞。西天驚峰巽角金剛窟坤方分来此土。離成当山也。

〔金峯山秘密伝〕卷上「一金峯山一峰習事」

相伝云。当山は驚峰分吾国勝地也。靈驗無双利生極此地也。即宣化天皇即位三年八月中旬雲上有声。其韻数万音也。〔震云。宣化天皇御宇僧聽三年戊午八月十九日。〕国土大動如露雷。即空有聲告云。大菩提效来。爰国土大「一作災」。怪。王臣不悟。然諸神現神變通。天照太神言。菩提者此何物哉。願顯示之。即天照太神告諸神言。一吾治天下後經數千万歳。日月雖久佛法未來。今此土衆生宿因故。仏生国巽角金剛窟坤方即乘五彩雲飛去。浮巨海波此来。即留大峰為金山。此今藏王涌現靈窟是也矣。

(同前卷中「一金剛藏王最極秘密習事」)

これらと比較してみると、これらは僧聽三年(宣化天皇三年)のこととするのに、文書は欽明天皇僧徳丁巳年とする。欽明天皇の治世には丁巳に該当する年はなく宣化天皇二年に当るようである。僧聽は九州王朝の年号で、それを僧徳とするものは今の所確認できない。また飛来した山の名を「さんかうせん」とするのも根拠は明らかではない。

善光寺の記事は太子三十一歳及び三十八歳の条に関係ある記事である。

白馬寺の記事は太子三十二歳の条に関係あるか。また提を築く記事は太子四十八歳の条に関係あるものである。夏安居の記事は太子二十四歳の条に関係ある記事であるが、井戸の記述はない。いづれも太子十歳の条の最後にあることおよびこの順に記述されることの意味は未解決である。これらはいずれも説話として成立していない。注釈類の引用か、或いは口伝の混入かとも思われるが未検。国会図書館蔵十卷本はこの記事を載せない。

註

(1) 広田哲通『中世仏教説話の研究』(一九八七、五月・勉誠社)所収。

VIII 翻刻本文

凡例

- 一 底本は岩瀬文庫蔵の『聖徳太子伝記』である。
- 一 底本のふりがな、左訓、注記なども忠実にその位置に置いた。但し、活字とする関係で必ずしも字の大きさは元のままではない。
- 一 底本の行数、改丁については一々にそれを示さなかつた。
- 一 底本は太子の歳次を単位として章としている。その中では原則として改行はないが、改行されているところはそれにしたがった。幾つかの章は見出しを持たない。神宮徴古館本、天理図書館本、異本

目次

第一冊 内題「聖徳太子伝記第一」

〔序〕

第一太子先生御事

太子二さいの御とし

太子三さい

太子四さい

太子五さい

太子六さい

太子七さい

太子八さい

ないし所の事

太子九さい

熒或星のうたの事

太子十歳

『聖徳太子本地』、日光輪王寺蔵の文保本太子伝、寛文六年板本『聖徳太子伝』等を参考にして、章とした。

一 底本の漢字は、元の字体に従うよう努めたが、幾つかは通行体とした。

* 本号には紙幅の都合で第一冊のみを掲載する。

本文	釈文
09	37
09	38
12	44
13	45
13	45
14	46
15	47
15	47
16	48
17	50
18	51
19	53
20	55

太子十一さい	26
太子十二さい	30
太子十三さい	32
参考までに以下の各冊の構成を載せておく。	
	70
	67
	62

聖徳太子伝記第二

太子十四さいの御時 <small>き</small> のとの第二
太子十五さい
太子十六さい
もりやと太子かせんの事
用明天 <small>もちみね</small> わり御さうれいの事
太子十七さい
太子十八さいつちのとのとり
太子十九さい <small>い</small> かのへ

聖徳太子伝記第三

太子二十さいの御時かのとの第三
太子二十一さい
太子廿二さい
太子おなし御年
太子廿三さい

太子廿四さい
さかのしやかの事
太子廿五さい
落字 <small>らくじ</small> らつくの事
太子廿六さい

聖徳太子伝記第四

聖徳太子廿七歳 第四
太子廿八さい
太子廿九さい
太子三十さい
太子三十一さい
太子卅二さい
太子卅三さい
太子卅四さい
聖徳太子三十五さい

太子三十六さい
太子三十七さい
太子卅 <small>とよ</small> さい
太子 <small>みそ</small> 十九歳
太子四十さい
太子四十一さい

聖徳太子伝記第五

聖徳太子四十二歳 第五
太子四十三さい
太子四十四さい
太子四十五さい
太子四十六さい
太子四十八さい
太子四十九さい
太子五十歳
太子五十一歳

聖徳太子伝記第一

それおもん見ればしやくそん西天竺さいてんぢくに出てけうほうを五濁ごじやくにあふきまとう東域とういにきたつてゆいしんをまつたにつたふ月国漢地くわつこくかんちもほうそのうるほひをうけちかひもはかいもせんしゆのけきをきかすしかるに此あし原国こくは天神てんじんちぎ世をおさめてすせんこうををくるしんむすいせい位くらゐをつめておほく百歳ひゃくさいにをよふといへともいまた三法さんぽうの名字ななづけを聞す一礼婦らいふ依よもなかりきこむに人王じんわう三十一代だいのみかとひたつ天皇てんわうの御宇ぎよにあたつて上宮太子じやうぐうたい子ここの国にたんしやうまし／＼て南無なむのせうみやうをとなへて中州ちゆうしゅうのしゆしやうにきかせしめてよりこのかた仏法ぶつぽうはしめて東漸とうぜんし神明しんめいあまねくかんあつすつら／＼仏法ぶつぽうのる布ふをかへり見るにしかしなから太子たいしのをんどくにあらすといふ事なし此ゆへにしんげむをたつとみ厚恩かうおんをしやした

てまつらんかために聊いさごてんのときかたきけんしをやはらけてみたりかはしくしんきのきゝやすきくわごにしろせりたゝねかはくはすいきをなしてひはうをなすことなかれ

第一太子先生御事

遍照金剛遺第 覚什

そも／＼上宮太子は救世大ひのすいしやくすいるいおうとうのほさつなりそのぜんしんをたつぬれはしんたん衡州衡山に五のみねあり一にはじかい二にははかい三には多日四にはげたつ五には般若なりかのはんにやの峯みねはんによたいに六どまてしやうをうけ化度をばんばうにほどこしたまへりたい六しやうのときはねんせんほうしとなつてけり又はなんこくの多い禪師ぜんじともいへりしゆ行きやうとしつもれりけたう目ゝにあらたなり時にさいはうより金人化来きんじんけらいすそのゆらひを見るにあしの一葉いちへつのつてさいかいよりわたつてかうさんにきたれりこれだまる大師だいしなりゑせんしにとつていはくおしやう此山にぢうする事いくはくのせいさうそや人をけとする事いくせんまといふかしおしやうやまのとくを見る山のをんをやほうするときにゑぜんじもくねんせんたりこゝにたるますゝんていはくこれよりとうかいに国ありあしはらとなづくかの国のしゆじやうもつはらとんよくをこうとしせつしやうをこうとすかの国にいたつておしやうさいとりしやうし給ふへしとつゝゑぜんしこたへていはく我このどのりやく

廿年ありそのゝちせんげしてかの国にいたるへしとやくす達摩大師だつまよろこひていはくわれさへきつてかの国にいたつておしやうをまつべしとてしうんにのつて東海とうかいをさしてさりぬすなはちわかつてう人わう三十代きんめいてんわうのそくゐ十二年にこの国にわたり給ふといへともけちゑんいまたじゆくせさるのあひたかたちをかくして卅じゅう年なりさてゑぜんじかうさんの化導けだうつきしかは僧そうそく一万五千人の御てしにつけてのたまはく我このとのけゑんすてにつきぬせんけ事をはつては東海とうかいにゑんありかの国にしやうして国王こくわうのまふけの君となつて如来にょらいのゆいけうをひろめじゆしやうをりやくすべしわれ受生じゆじやうのいこ卅七年をへてこの聖教せいぎやうたうくをとりにつかはすへしそれまてかならずしゆごし給ふべしとりわけ三人の御でしのそうにおほせふくめらるかくてをの／＼さいくわいのかうかんをとけたくおもはれはかの国へきたり給ふべしとてすでにせんけまし／＼きすはいの御てしはひきうにたえさりき日本国にかうたんしたまふへし日本国入王卅一代ひたつ天わうそく位いはみつのへたつ正月一日の夜たちはなのとよひのみことの后皇女こうかうじよに御むさうのつけありさいはうよりこんしきのそうきたつてきさきにつけていはくわれに救世くせの大くわんありねがはくきさきのはらにやとからん時に皇女かうじよゆめのうちにこたへての給はくそも／＼きんそうはたいしやうなり女人のたいないには三十六もつのふじやうとこしなへてにたゝへてけからはしいかて聖人しやうじんやとるべきやそうかさねていはく我さいどのぐわんしんちう也わゑをいとすふしやうをきらはさるなりたゝねかはくはやとらんその時后ときごともかくも大

聖のきよいたるへしとこたへ給ひしかはこんしきのそうくわうみやうをはなつてとんとくちより給ひぬと御らんして御夢さめぬうつゝにもまことにものをめる御心ちなりさてけうてんにわうしにむかひたてまつりて御夢のものがたりありしかはようめいのわうしおほせありけるはせけんに申ならへる事は物をのむと見るはくわいにんのさうなりとの給ふしかるにてあらはせいじんをはらみたてまつれりとあはせ給ひにけりよのつねの女人くはいにんしぬれは身もおもくおきぬもたやすからするしみあるにこれはひきかへて御身のうちもすゝしくおきぬきやうりにして四たいにうわなりまことにふしきにおほしめすさてこのむさうの夜はくはうみやう宮中をてらしあかさひることしいさゝかのくもりなかりけりすでに八か月をへさせたまひしかはたいないにこゑあつてうたつていはくむまれてしゆしやうをすくはゝやわつらふこゝろなからしめのりとほそをひらきつゝほたいの道にいらしめんと此哥を一日に三度一夜に三度うたはせ給ひけり君も臣もきとくのおもひをなし給ふそもくこのうたの心は三世の諸仏弘誓願のことは也又いはくしやうしてしゆしやうをすくはゝやとはしゆしやう無邊誓願のこゝろなりのちの三句はつきのことしむかし悉多太子まやのたいないにやとらせ給ひし時も晝三時夜六時の御せつほう有けるも六道群類のためなりけるとかやこの太子の御哥又もつてかくのことし大聖のりしやうはうへんみなもつておなしさてつねのならひは十か月にてむまるゝ事にて侍れともそのとしの十月もすきしも月もたちぬ極月にもなりしかともむまれ給はすつきのとしま

つのえたつ正月一日しきしまかなさしの宮にてたんしやうしましますはゝ后はし人のくわう女いさゝか御たい出の御事ありしに御むまやのくちにて御たんしやうありさいはうよりこんしきのくはうみやうせうようしでいきやう宮中にふんいくす侍女うねめののくきうてんさうとうして東西にさはきしに一のみまやにたてられたりけるあしけの御むまひさをおつて三といはへけり此馬はすなはち達摩大師の變作なり也太子のたんしやう御やくたくありしことなるによつてたるま太子の御たんしやうのおそき事をいかにやとすゝめたまひしにこの馬のこゑをきこしめしてすなはち御たんしやうなりぬこれによつてむまやとのわうしとなつてたてまつる事この御ちきりによつてなりさて侍女采女いたきたてまつり宮に入たてまつる后またあんしゆくあいのうちにつゝかなくわうしおとろきてつほね侍従のあへるに庭にたちまちにあかくきなるひかりあつてさいはうよりきたつて殿のうちをせうようする事やゝ久しくしてやみぬひたつ天わうなをみこのみやにすはれりたちまちにこのいを聞てのりものにめいしてとんとてよるほひてんとにをよひて又せうようする事あり天わう大きにことなつてくんしんにちよくしての給はくこのちは後にかならすなを世にことなる事あらんすなはちいふしにめいしておほゆきわかゆきをさためてもくよくしていたきあけて天わうむつきをもつてこれをつけてくわうこうにさつくくわうこうちゝのわうしにさつけ皇子を后にさつくきさきふところをひろけてしんたいをうるにはなはたかうはしし三日のゆふへには天わうゑんをまふけてものをぐんしんにたふ七日の夕

へはくはうこうあむをまふけて物をたふ宮大臣いけあいつきてみつき物をけんすこれをせうしてうふやしなひといふめのと三人をさためつけたてまつりたまひそのうち一人はおほむらしのむすめなりいづれもみやうしをさためらる一人をはひますひめ一人をはあまてるひめ一人をはたまてるひめとなつくかくてゆもよのつねの水にてはけからはしとてあらたに三の井をほらせらる一をはとう井となつく一つをはあかそめとなつ

一をはせんさ井となつくこの井はしゆしやうのれいすいあまきあちはひあり一はゆにてゆしゆつす此三の井の水をもつて御うふゆをあひせまいらす御めのともなのめならずもてなしかしつきたてまつる事たなころのうちにまほうしゆのごとしきて三人の御めのとじねんにふしぎのうたをつくりて哥をもつて太子をなくさめたてまつるそのうたにいはいくねんぜんほうしこほうしやとれ／＼こほうしうめるこのしたにはねきとう／＼のさふらふそといふうたをうたふ此のうたの心はねんせんほうしとは太子のせんしやうの御名なりこほうしとはくわこの一しやうまでしゆきやうして薫修功つもれりかるかゆへにこほうしといふやとれ／＼とは此国に生をうけてしゆしやうをさいとすへきことはなりねきとう／＼とはこの太子はたいこんけんのせうびなるゆへに日本こく中の大小の神祇太子をしゆこしたてまつりねきとは神につかふるものなるかゆへにと也このうたをまつたいにはあやまりてねん／＼ほうこほうしやとれ／＼こほうしむめの木のしたにはめきらきらの神のさふらふそといひなせりこれはあやまりなりすへててんたいにつたいしゆつたいしゆけかうましや

うたうてんほうりんにうねはんの八さうないしやうちの御ありさまこと／＼くしやくそんいにしへにかはる御事なかりききたいのふしきなりさてもかやうにめてたきなかに一つのなけきあり太子たんしやうののちみきの御てをさうけてひらく事なしたまにきすのふせいかなと御めのとたちこれをなけきあへり

太子二さいの御とし

二月十五日のあかつきたまてるひめにひそかにつけてのたまふやうあことにおほきなるちかひありこよひあけなはみやうたんに天下にひろうせばやとおもふ事ありなんちらあいこまへて／＼さわきする事なかれそのときた。＊。てるひめ太子の御しんいをまかくこせす申やうさやうの御大事をひろうあらん事をいかてかみかとにそうしんなくしてはたやすく我らはかりにてゆるしたてまつるへきと申ければ此事さてはわか大ぐわんにしやうげ出きたりなんとおほしめしてまことにはあこかいへるにあらずさる事あるへからすわれも御しんならむなんちもおほせられしほとにた。＊。てるひめまことにもやとおもひてまところみぬ太子はおほしめすやう夜もあけなは此事天わうきこしめされ宮中にもふうふんあらはかた／＼さはりとなりぬへしいまた夜もあけぬほとにわか大ぐわんをとけはやとおほしめして御めのとたちにもしらせすひそかに御しんじよをたち出させたまひてきよいなともめされは人しるへきあひたたゝよるめされ

しあかつき御はかまのまゝにて御出ありとうはうにむかつてさうの御たなこゝろをあはせて南無佛と三となへさせたまひてたんしやうよりこのかたひらかせたまはさりつるみきの御手をさうにかつしやうして南無佛とせうみやうしてこれをひらかせ給ひしに如来の御しやり一りうを御しよありけりさて南無の御こゑにおとろきて御めのとたちおきさはきて見たてまつれば宮中宮外くはうみやうせうらうせり太子は御はかまはかりにて御はたへをあらはしひかしにむかひて御手に物をもちたまへるよりひかりをはなつてせかいをてらすこの無佛せかいにはしめて三法のみやうしをとなへはしめてしゆしやうのみゝにふれさせりやくをゑせしめんとおほしめしけるあひだ二さいのちうじゆんはじぶんじやうぢうたるによつてこれをひらきはしめたまひけり又仏法とうせんのはれをへうしますす也いま法隆寺の御しやりはなむふつのときの御しやりなり

太子三さい

春三月三日わうし母后侍女うねめせい／＼として太子をいたきたてまつりてみやうの後園にしゆつきよななつてたうくわの御ゆうゑんありてわうしみつからたうくわと又かたはらにありけるまつの葉と二つおりて太子に申させたまふやうまつの葉とたうくわとはいづれかあひしおほしめすやととひたてまつりたまひしかは太子こたへて申させたまふやうたうくわはこれ一たんゑいほくまつのはゝ千年のていほくなりしかるひた

まつのはをあひすへしとおほせられしかはわうしもくわうこうも御御かんにたえさりき

太子四さい

ちゝのわうしのみやいはれいけへなみつきのみや御しやきやうくめのわうしまるこのわうしつゝしまのわうしをはしめたてまつりて太子もその中にまはり御遊戯ありけりいさゝ。御こゑたかくして御靜論ありけるにちゝのわうしきこしめされて御身つからつえをとつてわうしたちの御なかへたちむかひたまひしによのわうしたちはみなちり／＼ににけかくれさせたまひけるに太子一人にけ給はす御かたのきよいをぬき御はたへをあらはしてひさまつきてわうしにむかはせ給ふそのときちゝのみかとつえそはめて太子にむかひたてまつりのたまふやうよのわうしたちはちんにおそれをなしてみなにけかくれ給ふに太子一人なんそおそれすしてむかひたまふやとぎに太子いとけなき御こゝろに申させたまふやうわれあやまつてけしやうをすこしてちゝみかとの御いかりをかうふりこれふかうのいたりなりちゝはゝにふかうのものは天にはほんてん大しやくもこれをしゆこせす地にはけんらう地しんも地をいたゝかすといへりしかれは我天にはしたててもものほるへからす地にあなほりてもかくるへからすこのゆへにわれちゝの御つえをうけて御いかりをやすめんとおもひしかゆへにむかひたてまつるとないけのけうかいすこしももるゝ事なく申

させ給ひしかはわうしも御つえをすてゝ御なみたにむせひとかうの御返事もなかりけり

太子五さい

太子御おはすいこ女帝きさきにたちたまふ大臣くきやうはいらいのきしきをとりのこひしに太子ひそかに出御なつてしよきやうの御まへにすすんでれつにたつてほうはいのきしきをなし給ふ時に三人の御めのところを見たてまつりていそぎ宮に入たてまつりて申やう太子はわか君のまうけの君にて十せんのはう位にそなはり給ふへきとうくうにておはしますになんそかるくしく大地に御あしをおろし給や大國のふうきはいかゝ侍らんわか國のならひは國のくら位にそなはらせ給ふ人はしきにちをふむ事なしいかゝはせんとなけき侍りしに太子のたまはくなんちらの申所まことにそのいはれありあこもそのきをしらざるにはあらずしかりといへとも我國のくらゐをつく事あるへからす此ひたつ天わう世をしろしめさん事十四年なるへしそのつきにはわかちゝの天わうくらゐをつき給ふへしそれもわつかに二かねんのうち十か月のあひたにほうきよなるへしそのつきにわか御おちしゆしゆん天わう御そくゐあるべしそれも久しからずして人のためによりかひせられたまふへしそのゝちにたゝ今の御をはのきさきくらゐにつめて女帝として三十六年の御ちせいあるへしあこはこのみかとの御時摂政のくらゐをうけ給はつて御かとの御せいたう

をたすけたてまつるへきゆへにみらひは我くんしゆたるへきゆへにおかみたてまつるなりとこまやかに御物かたりありしほとに三人の御めのともことはりといひみらいの御事をあきらかにおほせありしかはきいのおもひをなせりきてこのときはくさいこくよりせんしやうの御てしがくがはかせといふ外典のかくしやわたれり太子のげでんの御ししやうとして孔子老子のをしへをさつてまつりかねて筆墨をわれにけんすへしてしよけいならひかくしおはします也この時までは日本國にすみをする筆をとるけいもなかりきたゝなはをむすひ木をきさきまつり事をなしかるにこの太子の御代にはしめてひつほくのわさをこれりとありまことにないけのしうさう人てんの師範にておはしませりかのがくがはかせと申唐人は日ほんこくにては五とくのはかせとかうせりとうんく

太子六さい

十月のころはくさいこくより法花せうまんとおのきやうろん二百よ巻をわたさる天わうにそうもんをへてこれをよみあかさせ給ひけり如来のしやうけうの日ほんへわたる事とこのとしにはしまる也

太子七さい

ときのみかとにそうしたまふやうきよねんはくさいよりわたるところの

きやうろん二百よくわん御ゆるしをかうふりてこれをひけんせはよとそんしさふらふとそうしたまふにさうなくゆるしたまはすいかてかたやすく大しやうのをしへをさとり給ふへきや時に太子はてんわうに申させたまふやう君はしろしめさしわれはしんたんのかうしうかうさんに六しやうまですみかをしめ此如来のゆいけうをしゆかくせりわれいまこの国にしやうをうけて七か年にをふよといへともおくちふまうのとくをくそくせるかゆへにさらにわすれすしかるへきはひけんすへしとかさねて申させたまひしにせんしやうの御事このときはしめて往因をとき給ひしかは天わうもしよきやうもふしきのおもひをなしおはしますそのときともかふも御はからひたるへしとて宮中潔祭してきやうろんをひけんしかうとくおはします太子天わうに申させたまふやうこのきやうろんをひけんしさふらふにちく／＼ことなりといへともをよその所説諸惡莫作諸善奉行のことはりを宗旨とせりしかれば国／＼のせつしやうをきんたんしましますへしかるかゆへにかの日時に月の六さい年の二季にせつしやうをやめ給ふへしそのゆへにかの日時に一さいしゆしやうのせんあくのけうをしるしてこくひやくのふだにのするしふんなり天にはほんてんたいしやくこれをしるし地にはゑんまほうわうこれをしるすかるかゆへに月の六さい年の二きにはこれをやむへし二季とは二八月のひかんなりこれは昼夜育等にしてしふんの正中たるゆへなりこのしふんに国にせつしやうをたんし人にかいをさつけしめは天子しゆみやうをのへ国土におうさいなかるへと申させ給ひしほとにすなはちりんしをくたされこくとにさい

日のせつしやうをきんたんせられけり

太子八さい

冬十月新羅こくの大わうより弘賀榮賢と申しんか二人をめしちよくして金銅のしやかかの三そんをわかつてう人わう三十一代のみかとひたつてんわうに挙送したまひしかは君も臣もおおなくともにきよかんあつてくたんの佛さうをあかむへきのむね殿上に御せいたんあるときものゝへのもりやの大臣すゝみ出てゐきを申さるゝやうそも／＼わかつてう日本国は神明のはしめてつくりいたしたまへる国なるかゆへに神明国となつてきせんしやうけのしよ人神の生育したまへは神のうち子なりこつしよよりこのかた此国のしゆしやう神事をもてくにのまつりことゝすしかればすなはち一天の風やはらかにして四かいなみしつかなりしかるにまたこくのゐきやうをあかめ給はゝさためてわかつてうの神明のれいあれて国中にしねんにさいなんをなしたまはん事うたかひあるへからすと申てさをたち宮中にたいしゆつつかまつりけりこれそもり屋の大臣佛法を違逆し太子にてきたいしたてまつりたまふはしめにて侍ける也時に太子かのしやか如来のほんふのむかししやうがくをしやうしめつこのりしやうをとき給へは上一天の君より下しよしんかにいたりて一代けうしゆ大しやうしやか如来のゐんい果後のとくをあきらかに太子これをときたまへりをよそ此佛はこんとはしめてしやうがくをしやうするにあらずして五百

ちんでんこうのいにしへ三阿僧祇^{あそぎ}ころのあひた大^{おほ}ころのしゆきやうゑん
 まんして久成正覚^{くしょう}の古佛^{こぶつ}なりといへとも従果^{じゅうくわ}向因^{きやういん}のりしやうをもつてせ
 めはん／＼にしやはにしゆつ。して従因^{じゅういん}至果^{しきふ}のしやうかくをとなへ三有^{さんゆう}
 のくんるいをどしたまへりかるかゆへにこのたひしやうかくをとり此て
 うより十萬^{じゅうまん}よりのゑんらうをへたて中^{ちゆう}天^{てん}ちくのわうくうに御^ごたんしや
 うあつて御^ごなをはしちた太子^{たいし}とかうす十せんはんせうのくら位^ゐにそなは
 りたまふへきちよくんの御身^{ごみ}なりといへとも七さいにしてほつしんし十
 九にしてしゆつけし三十にしてしやう佛^{ぶつ}したまへり一代八萬^{いちぱうまん}のけうほう
 をときたまひしかはさいせめつこをきはすうゑんむゑんのもの龍畜^{りやうしよく}き
 しんをしなへてみらいしやうふつのきへつにあつかりたまふつゐにさい
 せ八十かねんの化儀^{けぎ}ことをはつてこと／＼にうめつしたまふときめつ
 このしゆしやうをりせんかために御身^{ごみ}をこんとうの聖容^{しょうよう}にうつしとゝめ
 たまへりしかるに如来^{にがひ}めつこのゝちてんちくとゝまつて一千よさいし
 やうじんにかはつてりやくをほとこしたまふそのゝちしんたんしんら國
 にわたりたまふ四百よさいなりあこせんしやうにかうさんにおいてあか
 めたてまつるたしやうの御^ごはんそんかくのことく天^{てん}ちくしんたんをしな
 へ國^{くに}わう大臣^{だいじん}一心^{いしん}にあかめたてまつる所のなんせんふたい第一^{だいいち}のれいさ
 うなりしかるにいま佛^{ほとけ}ほうとうせんのはれにてわかつてうにきたりたま
 へりこつしよよりこのかたこのくにのしゆしやう神明^{しんめい}のりしやうのみを
 たつとみほんち佛菩薩^{ぶつぼさつ}のりやくをしらすそも／＼わかつてう一さい神明^{しんめい}の
 ほんちをたつぬれはみなおうこの如来^{にがひ}くしやうのさつたなりときにより

ところにしたかひ佛^{ほとけ}はさつとあらはれたまふ神明^{しんめい}のすいしやくとけんし
 たまふしかれはすなはちさい天上代^{てんじやうだい}のきこんのためにはふつほさつのか
 たちをけんしこれをとすみらひしやう佛^{ほとけ}のきへつをさつけ東土^{とうど}まつたい
 のしゆしやうのためにあつきしやしんのかたちをしめしめんくわをしん
 せさるしやけん^{けん}のしゆしやうをかうふくしむゐしんしちの佛^{ほとけ}たうにいれ
 たまへりもとより神明^{しんめい}と佛^{ほとけ}たゞこほりと水^{みづ}のことしかけとかたちにあ
 いにたりいまもつてしやへつなししかれはすなはち君^{きみ}も臣^{しん}ももろともに
 一さい神明^{しんめい}のそのほむぢ佛^{ほとけ}はさつのりしやうのために悉捨^{しつしや}多生^{たせい} 曠劫^{くわうきやう}に
 もあひかたき佛^{ほとけ}はさつのさう也^やと太子^{たいし}ねんころにとき給^{たま}ひければ一天^{いつてん}の
 君^{きみ}をはしめたてまつ。くんしん一とうにしんかうのおもひをなしたてま
 つりけるなりそのゝちやまとの國^{くに}に大^{おほ}からんをたて元興^{げんこう}寺^{てい}となつてか
 しやかの三そんをあんちしたてまつり給^{たま}ひけるなりこれすなはちによら
 いのめつこに一さいしゆしやうのためにしやくそんのしんるいをのこし
 とゝめたたまひける也^やさてもかのふつほうさいしよのしやかのさうやまと
 の國^{くに}くわんこうしのこんたうにあんちし給^{たま}ひけるを太子^{たいし}御^ごにうめつの
 ち五十年^{ごじゅうねん}のころにをよひ人^{ひと}わう三十九代^{さんじゅうきゅうだい}天^{てん}ちてんわうのきようにをよひ
 いまのいちの人の御^ごせんそたいしよくわんの御^ごちやくなんたんかいこう
 なんとにこうふくしをうちてらにたてらるゝ時もとよりの元興^{げんこう}寺^{てい}かの尺^{しゃく}
 迦^{しや}の三そんをむかへたてまつりてすへたてまつられければかのしやかの
 れいさうすなはちたくせんしていはく我^{われ}仏法^{ぶつぽう}とうせんのかわんりきによ
 つてそくさんへんこの國^{くに}まできたれりかさねて猶^{なほ}とうはうにむかは

んとほつするもの也なんそさいはうにむかはせたまつるやはやくとうはうにむかはせたまつれとたくせんしたまへはこれによつてむかしよりまつたいにいたるまで今にこうふくしのとうこんたうのこうもんにひかしむきにすへたまつり佛ほうさいしよのしやかのさうと申はすなはちこれなり

ないし所の事

わかつてうかいひやくのはしめに天照太神宮の御ほんちの事かたしけなくもたいしんぐうたかまかはらにおゐて三めんの銅鏡のおもてをまつ代のうちこにわかほんちの御たいをしらしめんと神明御身つからわか御たいをあかゝねのかゝみにうつしとゝめたまふに神のしわざ心のこくましますへけれどもおもふやうに御ほんちうつらせたまはさりければ第一番にあたつてあらはれたまふ御しやうたいの御かゝみをき伊の国よしの川になけいれたたまつりたまへり紀伊のうらの海人あみにかけひきあけたてまつるいまの日前の宮これなり第二番にうつしとゝめたまふにも御ころのこくくあらはれ給はさりければ伊勢太神宮の御しやうたいにておはしへりい勢の国かゝみの宮これなり伊勢太神宮の御しやうたいにておはしき第三番に御しやうたいおもふやうにあらはれ給ふをは百わう一百代の御てうほうとしてたいりのうんめいてんにましますないしところの御かゝみこれなりそもくてんせう太神ぐうのゑらひてあらはれたてまつり

たまへるところのないしところの御かゝみのおもてにうつしあらはれますしすしんしちの御しやうたいと申はいまのしやうとく太子の我ほんちのくわんをんにてまし／＼きとらん／＼

太子九さい

なつ六月のころひとつのきとく侍りつの国なにはのうらのすさきにいゑをつくりこゝろをすさまじうたをゑいする人侍りこの人わかつてうにはしめていまやうをゑいしいたしてける人なりそのしやうめいをは士師のむらやしまと申けるなりわざとかいへんをちう所としてひるはひめもすにうたひくらしよるは夜もすからうたひあかしまつふく風にきんをしらへかのうたのてうしとこしなへにきしうつなみをつゝみとし此うたのをんきよくをたすけすさきのちとりのともよふ聲までもこゝろをすましゆうきよくのみきりなりか。のこくくふく風たつなみにつけて一さいをまなこに見みゝにきくたくひいづれもりうすいのへんせつとゝこほりなしおもしろくいまやうをうたひ侍りけるそのこゑたえにしてまことにおもしろく侍りけるあひた夜る／＼天よりへんけのものあまくたりそのいろしやくしきにしてさうのまなはこみやうしやうのことしひかりをはなつきしんにて侍りけりやしまか家のかはらのうへにゐてうたのきよくをきゝ侍りけるきしんうたのきよくをきゝかんにたえすともこゑをいたしてうたひ侍ればおもしろき事たとへんかたもなかりけるなり天のあけか

たにはかきけすやうにうちうせ侍りけり人をいたしそのゆくゑを見せしめければひかりをはなしなにはのうらよりみなみへ三十よちやうこううをとんとすみよしのうらの海の中へとひ入侍りき此きしんさま／＼にきんきのうたをうたひ侍りけりハしまあやしく思ふやう此事いかさまにも国わう大臣とうの我大事のもつけいけとおもひてたりにまいり此よしをそうもんすときのみかとひたつてんわうしよしんかをめしそも／＼ぜんたいせんわうの御代にもかやうの事侍りけるやたしかにれいもんをひきかんかへ申さるへしと御たつねありければをの／＼せんきのれいもんをひかるといへともふんみやうならすそのとき天わうまことや聖徳太子こそ未然方來のとくをそなへ一さいの事におゐてあきらかにしろしめす御事なれば此事太子にうかゝひたてまつらんとおほしめして太子にたつねたてまつりたまひければ太子まことにかゝみにかけくもりなくかんそうしたてまつりたまふそも／＼これはそらにすむけいわくしやうと申ほしにて侍なりかのほしはけかいの人けんにもしくさひやうらんおこり飢渴ふじやくとうのさいなんしゆつけんせんとはかのほしどうしのかたちをけんし人けんにあまくたりせけんのもろ／＼のせう童子の中にあいましはりいまたきたらさるさきに人のせんあくの事をうたひにつくりひろうし侍るものなり天に口なし人をもつてさへつらしむといへりもつてのほかきんきのうたともをうたひ侍るてんかのみたれ日ほんの大なんしゆつらいし侍るへし一ちやう東方よりちしまのゑひすわかてうにせめきたつてわうゐにのそみをなし侍へしみやうねんの春三月の中よく／＼

御つゝしみあるへしと御そうもんありければ君も臣もといかひやうな人をおそれて太子の御ちゑのやむことなき御事をたつとみたてまつりたまひこと／＼くつうたつしたまふのみならずかくのこことく天のへんけをなす天文地利のみやうたうをもよくかゝみにかけあきらかにそうし給ひける御事ありかたさよと万人たつとみをなしたてまつり給ひけるなり

熒或星のうたの事

かのへんけの物ぬし哥をおもしろくきゝとりてともにうたひ侍けるほとにきしんのほんしやうのこゑおそれ侍ければあるしのハしまいまやうのきよくをとゝめ侍りければきしん我身のとかなりとおもひ出ていま一とあるしのうたのきかまほしさにつうりきじざいのものにて侍りけるをのれかほんしやうのおそれなるこゑをひきかへてたえなる聲にておもしろくうたのきよくをゑいし侍りければあるしこゝろとけてかんにたえすともにうたひ侍りけるに東西すみわたりておもしろかりけるなりやしまともいふはかりなしハしまかゝるへんけの物にこんこをましへあしかりなんかのけうみやうちうしよをいまやうにうたひあいたつねはやとおもひて夜ふけ人しつまりて五かうの天にをよひてときのでうしをとりのうたひ侍るそのきよくにいはいはくわかやとのいらかにつくる聲はたそたしかなのれよものくきともと三へんばかりをし返し／＼おもしろくうたひ侍りければかのへんけのもの

その返哥^{へんか}にをのれか身のけうみやうちうしよをこと／＼くあきらかにうたひあらはし侍りけるその哥にいはい

あまの原みなみにめくるなつみほし

とよさとにとへよものくさと

これを三へんはかりうたひ天もあけかたになり侍りければなにはのうらより三十よちやうこくうをとひすみよしのうらのかいちうにしつみ侍り太子そうしてのたまふそも／＼此へんけのものはそらにすむけいわくしやうと申はしなりそれ天に五しやうありをの／＼五方にぢうす五しやうのくらゐをあらはすその色五しきなりとうほうにはさいせいと申四季^{しき}の中には春三月をりやうす五しやうの中には木をつかさとるほしなり五しきの中にはその色あをきなりきのえきのと也なんほうにはけいわくせいと申夏^{なつ}みつきをりやうす五しやうの中には火をつかさとるそのいろあかき也ひのえひのときいはうにはたいはくせいと申秋三月をりやうす五しやうのうちには金^{かね}をつかさとるそのいろきなりかのえかのとほつはうには震星^{とんせい}と申冬三月をりやうす五しやうのうちには水をつかさとるその色くろき也みつのえみつのと中央^{ちゅうわ}にはちんしやうと申ちうをりやうす五しやうのなかにはつちをつかさとるその色きなりつちのえつちのと此五しやうてんかをおさめこくとをまもる物也しかるに天下にさいなんおこらんとては此ほしさま／＼にへんけしてさきたちてこれをしめすものなり時になをもつてかやうにはそうしたまふもの也太子かさねてちよくとう申たまふやうかのほしのうたのきよくにてしり侍りあまのはらみな

みにめくるなつみほしとよさとにとへよものくさととはわかつてうのやまとはにそらをはあまのはらとよめるゆへにわれはうらみなみのかたにすむとこたへ侍るつきになつひほしとうたひはんへるはなつといふもしは夏^{なつ}とくんするもしなり火^ひといふもしはひとくんするもしなりかるかゆへにそらにはなんほうにすみ四季の中にはなつ三月をりやうす五しやうの中にはひをつかさとる物なりとこたへはんへるなりおはりの句にとよさとにとへと申は日ほん国には十八の呉^いみやうありその中にとよあしはらの国と申侍ありそのところはあこかみやうしをもとよさとのわうしと申侍るさてこそとよさとにとへとわうたひ侍るなり

太子十歳

春二月下旬^{しゅうごん}のころ一天のらん朝家^{てうか}の御大事出くるきよねん六月のころ熒^{あき}或星^{わくせい}のつけによつて太子御そうもんの御こと葉^は一こんとしてたかひ侍らすとういせめきたつてわかつてうのわうゐをうはんとしてかつせんをなし侍るなりそも／＼かのとういかほむこくと申はわかつてうよりひかしきたきもんのはうにあいあたりまん／＼たる大かいの中に一千三十よのしま国ありこれを多そかちしまとなつて侍るかのちしまのあらゑひすとも四人の大將軍^{しやうぐん}をさきとして数^{かず}せん万おくのけんそくともをめしくしてわかつてうのわうゐをうはひたてまつらんとす聖徳太子^{しやうとく}しやうねん十さいの春のころ日ほん国にせめきたる時にわかつてうのわうじやうはやまとの国

しきのこほり三木のさと古蒙の村はつせ川のほとり磯城嶋金刺の宮これなりかのゑそか千しまの大せい日本にをしわたりてとうせんたうとかいたうりやうたうよりわうしやうへせめのほりけりそのせいいくせんおくといふかすをしらすせんちはすてにやまとのくに三輪の山きた城戸かみねにちんをととり侍ければ後陣のおほせいはあふしういしひらき石ふみあきたのしやうをいまたいてやらすといへりまことに天下のらん日本ののせうしなりかみ一天の君より下はんみんなにいたるまでうれへなけきたゝ此事にきはまれり上下きやうてんとうさいをわきまへすゑひすおほせいはいよ／＼夜を日につめてらんじう侍りければみかとおほきにゑいりよをおとろかしおほくのしんかをめし御たつねありそも／＼上代にもとうい日本にはつかうしかくのこつく国になやみをなすせんきありやとちよくし給へはをの／＼大臣ちよくとう申給ふをよそ日本国はそくさんへんとのせうこくなりといへともとういせいじうやゝもすればにしよりしんらはくさいのゑひすともせめきたる事とゝにをよへり又ちしまのあらゑひすともせめきたる事上古上代にもそのれい侍るなり人わう十二代けいかう天わうの御時とうい日ほんにはつかうつかまつるむかしもそのれいなきにあらすそれは上古上代の事にて侍るつたえてのみそうけたまはるこれはまのあたりわうしやうへらんじうすくはうきよすてにあやうき事にをよひ侍りしよこくのくんひやうをめさるゝしふんもまたすゑひすの大將くんたちまちにたいりにはつかうすへきよしふうふんすいかゝとなけき申たまひければ時のみかとひたつ天わうかのゑびすかひやう

なんをおそれたまひてほうけつをちしてたちまちにたしよへしのひの行幸をなしたまふ天照太神の御代人わうのてうほうとつたふるところのしんしほうけんないしところとうの三しゆのしんき御すいしんありてほうしやにめされてすみやかにくはうきよをたち出まし／＼てやまとの国いなふちやまのおくのたに／＼行幸ならせ給へる御こしのせんこにはけいしやうらんかくかはたしてにて御ともつかまつりたまへりうねめのくわんちよとうはまたをの／＼もはかまのそはをとりしうたんして申されけるやうはそも／＼天せう太しんはわかつてうの百わう一百代あふぬにまもらんといふ御せいくわん侍るにたう帝まではわつかに三十一代なりいまた六十九代をたにもまもり給はすみもすそ川の御なかれ此御代にたえはてたまふ事よとなきかなしみあひ給へりかたしけなくも天子はわうくうをすてに出させ給ひ山林にまよひたまひき御ありさまゆめともおほえすうつゝともおもひわきたるかたもなしあさましかりける御事なりつゝにいなふち山のたに／＼ほうしやの御こしをかきすへたてまつり天わう太子をしやうしたてまつりてみことのりしたまはくさてもきよ年のけいわくしやうのつけによつてそうしたまひしにたかはすいまま此大なんをこれりいかにとしかかのとういかなんをしつめ給はんや太子ちよくとう申たまふやうま事に一天の大じ四かいのなけき此事にきはまり侍るたゝしくんしんのせんぎともをうけ給はるにさいこうのこんけんせつしやうのもとひとおほえ侍るかのゑひすとものかたちきしんにおなしりきようしざいなりあるひははなつやのさきにどくをぬりければかのどくのやにあ

たる物千万人中に一人もたすかりかたきものなりあるひはきりをふらししやうをかくしさま／＼いくさのひしゆつ侍りければ日本のくんひやうとも百万きをもつてかつせんし給ふともさらになふへからすもしなをしていくさをなさしめはりやうはうともにせつしやうのこんけんざいごうのもとひたるへくさふらふをれすゝむてみつからせんちやうにおもむかんとすればようせうの身にしてそのりきよかなひかたしりそひてもくせんとすればまたてうかの御たいし此一じにありまことにしたいこれきはまりけり世はいまかうとそおほえ侍るとてさめ／＼とうちなき給ひければ君もしんもふたゝひわうくうにくわんきよなくつゐにさんやにかくれ給ふへきにやと御しうたんふかゝりける御事なりまことにとうさいかきくれてこゝろほそく侍りけるに太子のたゝ一こんをもつて君をたすけたてまつりらんせいふたゝひもとにきしたまへりそうもんにいはくそも／＼一天のらんせいはいまはかうとそおほえ侍るしかればあこ御ゆるしをかうふりあひすのしやうにおもむきはかりことをもつてむねとの大しやうくんらをせめいたししよそんをあいたつねいかるこゝろをやらはらせけんのおんふをうかゝふへし太子たゝ一人しろき御馬にめしあひすかしやうへうちむかひ給ひけるわさと御ともに人めしくせられすたゝそかの大臣はかり御ともつかまつり侍りけり山は太子の御うち神やまとの国三輪の大明神はわくはうりしやうのれいさんなり太子三わのとりの御まへにしてせきあひの御そてをかきあはせねんころにとういかなんを御きせいしたまふたちまちに御むまにめししやうにおもむき給

ひければしやうないしやうけのあひすとも太子をめにかけたてまつりめん／＼に申あいきけるはさて／＼たゞいま見えきたる人はあさうあり此国にせいしんしゆつらいしたまへるときくいまた十さいはかりにしてようちふせうなりとおもひいやしめたてまつるときに太子かのあひすともをかうふくせんためにはしめてしんりきをけんし給へりめさるゝ所の御むまにかなむちをしとゝあて給ひければ御むまたちまちにこくうにのほりかゝたるいは山を御むまの四のひつめにかかけ大はんしやくをみちにけくたき給ひて太子御あふみのはなにておなしくいは山をけくたきたまひければしやうないしやうけのあひすともしんこくなるによりたちまち神明のけんしきたりたまふとておほきにおそれをのゝくふくしやうくんのあらあひすともはんしやくをいたきはるかたかきみねより太子になけかけたてまつり侍りければ太子かねの御むちにてはたとあはせまし／＼てたかさ一ちやうはかりに七とまでなけあけまし／＼てそのゝちにしにとをくなけさせ給ひければはんしやくらいでんのことこくくうをひゞかし三つにわれて二つはあふしうみつ川にいたるいはねといふさとありかのいしのせい六七けん屋のことし一つははりまの国逸済郡の海のなきさになけつけまし／＼ければなけいしのうらと申さてこそ国のめいしよにて侍るなりつきにふくしやうくんのあらあひすどくのやをはなしいたてまつりければ太子天にむかひてのたまはくそも／＼天にはむきやうに正り正けんをもつてたいとすいま此けうとほうあくのともからてうてきとなりてくんわうのあいうをなやましたてまつりはんみんをわつらは

すかの一のやをとりてけうとをかうふくしたまへと御むちにてこくうに
 なけあけたまひければふたゝひ大地におちすうちうせけりつきに二のや
 をまた御むちにかけにしにむかつてなけたまひければはるかのにしき
 いの国^か日^ひ前^{まへ}のみやのとりになけ給ひけるゑひすともゝをのれかたのむ
 所の武^ぶ藝^げのみちきはまりじゆつつきて侍りければはかにきりをふらし
 しやうをかくしけるを太子きりをはらしたまひければしやうないしやう
 けのゑひすともしんたいきはまりおほきにきやうてんし侍りける時太子
 わかつてうのゆみやのりきようをおもひしらせんとおほしめしてはうへん
 ちやうの御ゆみじんづうのかぶらやをとつてよつひきはなしたまふこれ
 みつめのつのゝかふらなりらいてんのことくゑをいたしゑひすかしや
 うを七へんまでまはり天へなりてのほり地になつてくたり上下らんでん
 して一城^{しやう}のうちのゑひすともめいわくせしめゆみやのもとすゑをわきま
 へすしかるにかの四人の大しやうらのかしらにつきてまはりければかん
 にんすへきやうも侍らすとて四人の大しやうくんしやうないをまかりい
 てゝ太子の御まへにひさまつつかつしやうししかるへくはいのちはか
 りをたすけたまへとかうさんしたてまつる千しまのあらゑひすともかた
 ちきしんにおなしかみあかく色くろししかれとも日本の人のくわいせん
 のためにわたすところのいろ／＼のあやにしきとうのいしやうともをも
 つてたつひあさらしとどのかはをこしにまきをのれかいのちとゝもお
 しむところのわしのめいばきりふなかくろつまくろ天^{あま}面^{おもて}遠^{とほ}露^ろむらくも
 など申めいはどもを引あつめてくひにかけて侍りけるたからを太子の御

前にそなへをきしかるへくはいのちとひとしきたからをたてまつるいの
 ちはかりをたすけさせたまへとなけき申けるなり太子四人のゑひすの大
 しやうくんにつけてのたまはくそも／＼なんちらか大しやうぐんとうの
 けうみやうならひにふくしやうくんとうのみやうしうしてめしする
 ところのせいのかすたしかなのり申せとのたまひければゑひすともを
 の／＼異^い口^く同^{どう}音^{おん}になのり申さんとすときに太子のたまはくなんちらしは
 らくしつまるへしまことになんちらかけうみやうせいのみんしゆことこ
 とくさきたちてまるはぞんじおほしめす物なりなんちらか大しやうぐん
 のけうみやうまつ一つには綾^{あや}槽^{そう}二には魅^ひ師^し三には飛^と雲^{うん}四には走^は雲^{うん}といへ
 りふくしやうくんはやしや神^{かみ}童^{どう}落^{らく}珍^{ちん}童^{どう}といへりそのほかめしするとこ
 ろ千しまのむるいのゑひすのかす三おく六万八千七百卅よ人なりとのた
 まひければときゑひすともゝとうをんにゑをあげてかんしたてまつ
 る君の御いさらにたかひたまはす日本の神なりとふかくしんかうたてま
 つるなりつきに太子ゑひすともかしよそんをたつね給へりそも／＼をの
 れらかこんとわかつてうにわたるところのしよそむなに事そやをよそ上代
 をきこしめせはわかつてうの人わう十二代けいかう天わうの御時なんちら
 かせんそのゑひすとも今のことくおほくのけんそくをゐんそつし日本を
 したかへんとせしときもしよくんひやうにちよくしてあるひはかうへを
 はねあるひはすちをたち一人も本国にかへらすちうせらるいまむかしの
 きうれいをもつて一人もたすくへからすちうすへきよし君臣。同にせむ
 きすすてにあひきたまりぬ今。とうさいなんほくよりくんひやううんか

のことくはせきたるらんなんちらかいのちたすからん事一人もあるへからすしかるにあこはせつしやうをふかくいましむるあひたかなはぬまてもなんちらをたすけんかためにひそかにはつかうせりとく／＼をのれらかしよそんを申へしとせめたまひければ四人の大しやうくん一同にこたへ申ていはくまことにきみのおほせのことくむかししんらかせんそのゑひす千しまのあらゑひすともをあひもよほし此国にまかりわたりて侍りけるを一人もいきてほん国にかへしたまはすしてうしなはるるかゆへに一にせんそのくわいけいのはちをきよめんかため也二つには又せんそかしよそのことく日ほんこくをこと／＼くわうりやうまでこそかなひかたく侍るともわうしやうよりひかし日ほんをはんこくたまはりてしんらかしんたいせんと申たてまつる太子かさねてのたまはくそも／＼なんちらかしよそんりやうてうとうにたしかにきこしめす中にも日本国をしたかへて国わうとならんといふこそしよそのほかにおほしめせそれゑひすらかかたちきしんにおなし身もまたきしんのりきようありそのせいうんかのことしをの／＼とうしんかうりよくしてまへにはなにものかたいやうにをよふへきやまことにわかつてうはそくさんへんとのせうこく也といへとも神明しんめいのつくりいたし給へる国なればしんこくとなつけしやうけのしよ人はまた神明のしやういくしたまへりかるかゆへに神のうちことしてそのりきようたこくのゑひすにすくれたりしかればすなはちわれむまれてわつか十さいなりみつから一人のりきようにたにもすせんまんのおほせいかなひかたきゑひすともいかてか日ほんこくのおほくの神明

のうち子をしたかへてこの国のぬしとなるへきやゆめ／＼思ひよるへからさるもの也とのたまひければもろ／＼のゑひすともくちをとち物をも申さすゑひすともふかくしんかうのおもひをなしやゝひさしうして申あくるやうまことにをろかなるかなちんらもとより此いはれわきまへしらすせんたいにもこうたいにもこの国をしたかへんとおもひかけ侍る事まことにもつてをろか也しかるへくはいのちはかりをたすけ給へとかうをこひたてまつり侍ければ太子こたへてのたまはくそも／＼われ今なんちらか命いのちをたすけ本国ほんこくにかへさんをのれらかしんしこんいこ日本のためうらみをなすへからすと三輪みづ太明神をかけたてまつるへしとたしかにふかきちかひをたつへしとせめふせたまひければゑひすとも三輪川みづがはにて手をあらひくちをすゝきかの三輪大明神にむかひふかくちかひをたてゝいはくそも／＼ちんらかしごんいこしそん／＼にいたり清明せいめいのこゝろをもつて君をつかへたてまつるへし此ちかひをそむかはてんちひらきまし／＼世にあらはれ給ふ三輪の大みやうしんそうして百わう宗廟そうぼうの御はちをかうふりししそん／＼こと／＼くみなたえほろひんとちかひ侍るに大によろこひのあまりに日本のてうほうたるいろ／＼のあやにしきとうをろくもつにあたへたひければゑひすともいよ／＼太子の御ほうをんをおもひしりたてまつりたちかへりらいをなしごまつたいしゝそん／＼にいたるまでもこの国にむかひうらみをむすひたてまつらしとちかひてほんこくにかへるうだのこほりにいまみちありゑひすともにけうせたりのちにすてに七百よさいのいまにいたりて千しまのゑひす日ほんにはつか

うする事なしまことに上宮太子のこうりう佛ほとけはうりやくしゆしやうはまつたいせいたうをもとゝす御さいせにかたしけなくもとうせいのゑひすともしたかへてまつせのいまにいたりてかみ一天のわうゐをあんをんにたまたしめ四かいのなみをこゝろやすくしてそのゝちだうたうをたて佛さうきやうくわんをあかめおほしめすやうに佛ほうを御こうきやうありけるありかたき御事共也くわんをん大しやうくせの御ほうへんありかたかりける御ふるまひともなりきんめい天わうのきよう僧そう徳とくひのとのみ春のころりしやうしゆせんこんかう蝸かのうしとらのすみ破裂はくちつしはくうんにせうしてやまとの国大みねに落山らくざんしぬさんかうせんこれ也せん光寺こうじの如来の御事天ちく月蓋がふちやうしやはくさいこくにては聖明せいめいわう日本には善光ぜんこう三世のけいやくの御事天ちくのからんのはしめはしゆたつちやうしやこんりうせし一百ひやく院いんきをんしやうしやこれなりしんたんこくにはかんのめいていの代に興生寺こうしやうじ白馬寺はくばしやうじこれなり日本国には佛法ぶつぽうさいしよの天わうしこれなり天ちくにはならたししんたんにはくはし日ほんには六はらしこの三つのてらはきたむきにもんありしなのゝ国にいもこちよくしとして神祭してすなはち夜に入て俱具ぐぐをまうけにはひをとゝのへたき太子七ほうのへいはくをさゝけけいしやうし給ふあいたうけ給はるものみな悲涙ひなみをながし大小のしんき宮中にやうかうしたまふそれよりあしかきの宮を神やのむらとなつて四月十六日よりあんこをはしめておこなふ七月十六日にいたりて九しゆんなり夏堂げだうにかんきよすこれしつかにみちをしゆせんとなり惠慈ゑじ惠愍ゑみんとり申て元興寺げんこうじより妃行ひぎやうすあか井のかくのふた

にいはいくわしうたかちのこほりにれいちありあんこゐんの井とかうす甘水かんすいりうくうよりなかれて京邊きやうへんにとゝまりこれをのむにいのちをますしるへし／＼妙法源起みょうほうげん覚如蜜水かくにみつすいよりくたんのふたは一尺一寸しちすんのしろかねなりもん字はこかねをもつてしるすみな古文こもんなり太子四十の御とし九月太子そうしていはく國中にようすいつゝみをつかしむこれはいせんにいけありといへともまさく田のためにいけのつゝみをつく事なしこれよりはしめてなかれする水をいけにつきこめむなくおち行川をせきあけて田のようすいとせりされはやまとよりつきはしめて山しろの国に大なるみそ栗隅くりぐもにほるこれさがのみなみなる大井の事なり此川を大井川となつくるなり日ほんの井みそのはしめなりしら露にこけのころもはしほとも月のひかりはぬれんものはまうねんほんなふの心だいばじやけんによつて如来のしやうかくあらはりもりやかあくきやうによつて太子のしひはせんあくにたいてきすまよひさとりにむかふなり天台てんだいのこゝろあんくわふ二といへるともにまたしかなり卑因ひいん單星だんせいをもつてならざるなり佛神本進ぶつじんほんしん同一どうい軀たいなるをかれをひしこれをしらすもりやと太子の意案いあん名別なべつなり

太子十一さい

春二月のころやまとの国たかちのこほりなにはつるきのいけの北なるこはやしのそのゝうちにおゐて三十六人のとうしをあんそつしてさま／＼

の御せうふありはしめには武藝^{ぶげい}のみちを^しへ給へりこれを弓石^{きうせき}のあそひとなつくもろく^{／＼}のどうじにつけていはくそもく^{／＼}日はんは神國^{かみくに}にして人の心もかしこくはかり事よの國の人にすぎたりなんしの身もつとめしよたうにおゐてけいこあるへきもの也なかんつく文武^{ぶんぶ}の二つこれ定^{さだ}ゑの二法也文道のをしへをするものは君のためちうをいたし父母のためかうありてんかのせいたうをわきまへばんみんを撫育^{ぶいく}する事。そうしてこくとく^{／＼}じんぎれいちしんの五しやうのみちをそなへけふはきち日なりまつふけいのみちをけいこあるへしやくし十二しんしやう千しゆの廿八部^{はちぶ}しゆはみなおうこの如来くしやうのさつたなりをのく^{／＼}すいるいおうとうの日かたしけなくもにうわにんくのたいをあらためゆみやをもち物とし刀杖^{とうじやう}を執^{しゆ}ちしてあくまをかうふくし給へりいはんやほんふにおゐてをやこのみちかけてはいかてかをんてきをたいらけ國のけうとをしつめへきや太子身つからまつゆみをひきやはなち給ふむかししんたんにきこえしやうゆうかていをつき更^{かへ}盈^{あふ}か弓のいきをひもかくやと見えたりちたひはなしもゝたひはなち給ふやとおほしめすやつほさらにはつるゝ事侍らすつきにいしの御あそひと申はご双六^{そうろく}はんのうへの御あそひとも也そもく^{／＼}はしめて此みちをたくみいたし侍りける人はしんたんの天子けうわうならひに子建^{しけん}と申ける人のはしいめてつくりいたし給へりかやうのいしのあそひにおゐても太子ことく^{／＼}つうたつしたまへりしかのみならすいさをあつてもんしをかきつけおほくのいさこともをうちみたしてへんしのあひたにもんしのしたいをえらひあはせてこれをしゆ

んし次第^{しだい}にことく^{／＼}よみもつらね給へりかるかゆへにかの御ゆみのあそひこのいしの御あそひともをいしゆみのあそひとなつけ侍りきこのほかに又しいかくわんけんとうの御あそひは中く^{／＼}申にをよはす一さいのしよたうにおゐてげいのうをきはめたまへりしやくそんあんいにしちた太子のいにしへももつてかくのことし人けんの一さいのけいのうことには文武^{ぶんぶ}の両^{りやう}げいをきはめ七さいの御ときは斛飯王^{こくはん}の太子だいはだつたにたいしてきさきあらそひのさまく^{／＼}のせうふをなし給ふとき御ゆみのせうふにさたまり侍りける時は祖父^{そふ}獅子^し頰王^がの御ゆみ五百人してはりけるをめしいたされ七さいの御ようちの御身一人してよくこれをはりつるうちしたまひける御こゑ上はほんでんまてとをくきこえひきはなし給ふ御やはあやまたすあつさ三尺七鼓をいとをしぬ猶大地のそこ十六万八千ゆしゆんのこんりんさいまていとをしたまひはんへりきいまわかつてうのしやうとく太子もまたもつてかくのことしもろく^{／＼}のとうしにともなひたまひてしゆく^{／＼}のせうふをけつしたまひあるひはすまふをとりかつ事をえあるひはちくばにむちをうちとをくろくちをはしりたまへりしこうしてのちにははんりのこくうにのほつて雲をわけかすみをふみ空中にざくわしひぎやうしてじさいのとくをほとこしたまひけり時にどうしたちたいちにおほへてたにひとしくふるまい侍らす太子はんりのこくうにのほりたまひければしよ人めをおとろかしてきやうてんし侍りきをよそ大聖大こん御ふるまひなればはしめておとろくへきにあらすといへともすいるいおうとうのまへにはふしきなりける御事ともなりかやうにぶげいの

御あそひをはつてその後又文藝をおしへたまへるときに太子の御きやう
 たいのわうしたちならひに人／＼のきんたちそうして卅六人のどうじら
 に御やくそくありをの／＼一さいのなん字をとゝのへさる事はなと／＼
 ともにかきあつめてめん／＼にいくわんのまき物ともをさゝけとうしに
 よみあけて太子にとひたてまつるときに三十六人のとうじの中におすへ
 たてまつり八はうにたちわかれておなし時にこゑをあけていくとうをん
 によみあけはんへりけるを太子いづれもこと／＼くきこしめしわけ給ひ
 はんへりきそうして天ちくしんたんしちいき三国さうしやうしてよみつ
 たふるかのもんしの訓真をいち／＼めい／＼にいづれもりうすいのへん
 せつとゝこほりなくこたへたまはんへりきかくのこことくれん日の御せ
 うふに太子ひとしき人さらにましますかの三十六人のとうしのけうみ
 やうをはまつたいのためにやまとの国ほうこうしのかうたうのかへいた
 に太子御自筆にかきつけたまへり

磨子親王 筒嶋王子 米目王子 小林王子 大原王子 小嶋王子
 雲見王子 難波王子 早来王子 石見王子

これはみな太子御きやううたいならひに御一もんのわうしたちなりつき
 には又けいしやう雲客の君たちその御けう名とうをかきつらねたまへり
 嶋角童子 小嶋童子 早走童子 鬼勝童子 岩手童子 月顯童子
 松隅童子 小松童子 山路童子 板住童子 走出童子 椿来童子

鳥羽童子 弓取童子 早目童子 足輕童子 繩手童子 片山童子
 遠山童子 高松童子 鬼取童子 葛来童子 十市童子 田鳥童子
 犬飼童子 馬耳童子
 右三十六人也

そも／＼この三十六人のとうしたちはみなこれ大しやうごんじや久位
 通達の大ほさつとうなりしはらくしゆ伴のりしやうをなして太子のかん
 とくをあらはしたまへりこゝをもつてひゑいさんのなうそ慈覚大師しや
 うとく太子の十六さい御ゑいをみつからゑつにしたてまつり御くやう
 をのへたまひけるときの御たんとくのもんにいはくかたしけなくも上宮
 太子しやうねん十一さいにしてしよとうしいし弓のあそひしつかにおも
 ん見ればこれ三十七そんのすいるいおうとうのりうしやうをめぐらし給
 へりたつときかなむまやとのわうし御とし十六さいにしてもりやのけし
 んをちうせしめ給ふ事つら／＼おもん見れば又十六ほさつの因行證入の
 くとくをへうしたまへりとうん／＼

蓮華三昧經 文 云

歸命 本覺 心法 身常 住妙 法心 蓮臺
 本來 具足 三身 德三 十七 尊住 心城
 暫門 塵數 諸三 味遠 離因 果法 然具
 無邊 德海 本圓 滿還 我頂 礼心 諸佛
 このきやうもんによりて慈覚大師聖德太子をたんとくしたてまつりたま

ひけるなりたゝし此太子十一さいの御ときのいしゆみの御あそひ三十六人のとうしは一会のそけともなり能化しやうとく太子をくはへたてまつり卅七尊にまんしたまへりかくのこつくれん日の御あそひともをちゝようめい天わうこかけにたちしのひて御多覧ありて宮にくわんきよなりてきさきにつけての給はくそもくこのむまやとのわうしねんくせい／＼にじじ夜々の御ふるまひどしほくをおとろかしきとくともまことにさま／＼なりといへとも此ほとれん日の御あそひともこゝろもことはもをよはれす一箇のうちに三十六人のとうしを八はうにたてゝとなふことはをとうじにこことくきゝわけたまへはけふよりこの太子をは八耳のわうしとなつたてまつるへし太子十一さいの御ときより又ちゝようめい天わうのちよくちやうにて八耳のわうしとなつたてまつりたまひけるなりとをく天ちくをとふらふにしやくそのさいせ十大御てしもくれんそんしやは天恨じさいのとくをそなへたまひけるにもいまわかつてうのしやうとく太子はおとらさりけり又しんたんととふらへは漢家のてんしはしめて第三代くわうていと申けるこくわうの御世に十人のしんかありきしやくそん十たいの御てしのことしをの／＼みなとくを身にくそくし侍りき徳黄帝の十とくをそなへ十人のしんかの中に離朱伶倫とて二人のしんか侍りきりしゆと申けるしんかは天眼しさいの阿那律そんしやのこことくにまなこあきらかなるとくをそなへいながら千里のほかに蚊のかたもゝのおちたるをあきらかにこれを見る伶倫と申しけるしんかは又天耳しさいにしてもくれんそんしやのことしみゝのかしこきとくをく

してこれもまたいながらせんりのほかに蚊のなく聲をあきらかにこれきゝはんへりきいまわかつてうのしやうとく太子も又またかくのことしむかしのりしゆかあきらかなるまなこをそなへすといへとも宮中にゐたまひなからてんちくしんたん十はうの事をみなせうらんしにしへのれいりんかみゝにあらねとも榻のうへにさしましかくてはんでうしちいきの三十六人のとうしこと葉をこと／＼くわきまへたまへりまことにしやうとく太子の御ほんちは救世くわんをん三世れうたつの御ちゑはからかなりといへともすいらいおうとうのまへにはふしきなりける御事ともなり

太子十二さい

秋のころかうらいこくのしやもん日羅しやう人しやうらいせりそれわか朝の人わう三十一代のみかとひたつてんわうはしんをもとめんかためにはくさいこくに御つかひをたてられたまふそのけうみやうをは吉備海部の羽しまのむらしと申ける大臣をちよくししたまへりすなはち井北達と申けんしんをたつねえてあいともなひてきてうつかまつり侍りけるときかのにちらしやうにんおりふしはくさいこくにわたりて日ほんにまかりわたらんとするときに井北達とうせんしてわかつてうにわたりき九月けじゆんのころにつのくにはのうらにつきはんへりければわかつてうのわうしやうよりはくんしんそのかすをしらすゆきむかひもんとうせられけるしかうしてかうらいはくさいりやうこくのそうそくのけんしんら

いてうしてりせいのまつりことをせいたんするよしを太子きこしめして
うかゝひ御覽せられけるとき御すかたをやつし御かたちをすみにぬりあ
さのころもなほのおひをむすひくたしまし／＼ておなしほと十一二さ
いのけすわらはへ十よにんめしくして太子なにはのうらにきやうけいし
てけすわらはへの中にたちましはりまし／＼てかたをならへたもとをつ
らねあそひたはふれてなにとなきやうにて大国のたひ人ともをうかゝひ
御らんせられけるに日羅しやう人かの十よ人のとうしの中に太子をあや
しみたてまつりてやつこにつけていはくこゝなるわらはへ身につうりき
ありこころにしんりきありしか／＼のいしやうのいろのもんをきたると
うしなりあひかたらひてきたるへしといへり太子御みゝかしこき御事な
れはこのよしをきこしめしやうやくにけさらせたまひけるときにちら
しやう人いそぎふねよりとひいてゝおいだてまつる太子御うしろの御こ
ろもをにちら上人の手にかけつはつしつあいちかくにけさらせたまひけ
れはにちら上人はたゝいまとらへたてまつらんとおもひはんへりけれど
もつめになはす手をむなしくてまかりはんへりぬ太子はちゝのてんわ
うに申させたまふやうそも／＼大国のりよかくともをよくうかゝひ見は
んへりければ一人はあこかせんしやうのてしににちら上人と申そうにて
はんへりいまはこゝろやすく御ゆるしをかうふりてせんしやうの事とも
をたかひにせいたんすへくはへれとてつねにめさるゝところのせきゑを
きたまひてなにはのうらにきやうけいなりければ日羅しやうにんていし
やうにひざまづきかうへをちにつけなみたをなかししんちうにおもひつ

らねはんへりけるはこれはまさしくわかほん。しやうむまれかはりたま
へりあはれなるかなむかしのししやうははるからうしんのていにおは
しますへきに二しやうにかたちをあらためたまひぬれはわつか十一二さ
いのとうしとなりたまへりかなしきかなやわか身はまさしくかの御てし
なりといへともいまた先身をあらためすハしゆんのらうたいとなりぬる
事かなそも／＼太子の御ほんちをたつぬれはとをくはごくらくしやうと
のふ所大しちかくはふたらくせかいのけうしゆ也しかるにいまかくのこ
とくすいるいおうとうして大ひりしやうをほとこしはんへりける也その
れいもんにいはいく

敬礼救世観世音傳燈東方栗散王とをしかへし／＼三とらいしたてまつ

りけるなりもんの心はほんちはくせくわんせをんのすいしやくとうはう
につほんそくさんこくのわうゑにむまれ給へりといふをとなへはんへり
けるなりときに太子とりあへすつきのりせうくのものをつけてとなへた
まへり

從於西方來誕生開演妙法度衆生太子これも三度をし返し／＼となへた
まへりもんのこゝろは御ほんちはくせくわんをんむゑんのしひにもよ
ほされさいはうしやうとよりとうはう日ほんこくにきたつて佛法をひろ
めしゆしやうをりやくすといふ御こゝろをこたへたまひ侍りけるかくの
ことく太子の御ほんちくわんをんとらいしたまひたてまつるときたちま
ちにかんおうありてみけんよりくわうみやうをはなしにちらをてらさせ
たまふにちら上人もまた身よりくわうみやうをはなちたかひにてらしは

んへりきそのとき太子の御ともの人／＼ならひにちらしやう人のめしくするところのほくともをの／＼しんきやうのおもひをなしすいきのたな／＼をあらはせりその／＼太子にちらをちかくめしてのたまはくそも／＼あことなんちとたしやうの師弟のちきりはしんちうなりなんちはいまたしやうをかへすむかしのていなりかるかゆへにてしなりといへともそのていらう／＼としてかしらに三冬のゆきをいた／＼きまゆには八字のしもをたるのこるいのちいくならず見るにつけてもあらはれなりわれはなんちかむかしの師しやうなれとも二しやうにかはりぬれば古跡をあらためようちようしやくのとうしなりわれしやうをへたつといへともむかしの事はすこしわすれすまことにわかれやすくしてあひかたきはしやうしむしやうのならひなりとて太子も御なみたをなかしたまひければにちらもともになみたをなかつ太子の御ともの人／＼もおなしくあらはれをもよほし侍りきときにちらひたんしていはくかなしきかなた／＼いま太子御驚覚によりてせむしやうの事をさるとるむかし君にわかれたてまつりてのちはちのみ子の女をうしなへる／＼ちして一日へんしもほんごくに心と／＼まりはんへらすとうかい日ほんごくにむまるへしとしめしたまひしによつて君かうさん御にうめつの／＼六ねんにあひあたりて一ようのふねにのりはんりのなみにた／＼よひ御ゆくゑをたつねたてまつるほとにこ／＼にまかせさるかいはしやうなればあくふうにはなたれむかしわつかなのみにき／＼しほうらいさんにいたりぬしゆんふうをえすしてかのしまにとし月をかさねせんちうなみのうへにしんしんをくるしめ髪もちや

うしぬればひとへにぞくしんにことならずかうらいこくよりおもひたちこ／＼のひくにまかせとうかい中のしまにふきつけられあるときは又はくさいこくにいたりことし七かねんのあひたなけきてとしをくりかなしみて日をかさぬしかるにほうらいせんにわたりてふしのくすりをやぶくしけんしやうをかへすしていのちのうちにた／＼いま二しやうの師しやうを見たてまつるこそうれしけれとてさめ／＼とうちなきはんへりければ太子もともになみたをなかしたまひけり

太子十三さい

秋九月に弥勒石像一たいならひに二臂のによりんくわんをん一たいはくさいこくの大わうより日ほんの国わうへをくりたてまつりたまへりかのほんそんを太子とそかの大臣ともろとはいしたてまつりくやうしたまひけるときに太子そか大臣をけうけしぐわんしゆとしてはしめてやまとの国たかちのこほりとよらのしやうないに大からんをこんりうしたまひきをよそかの佛かくと申は

金堂三間四面講堂七間二面

五十六間僧坊鐘樓一字

二階樓門一字五重寶塔一基

右この大からんを太子十三の御としことこくつくりをはつて寺号をば興嚴寺と太子御みつからかき給ふ今はところの名をとよらとこれを申あ

ひた世の人の御たうをとよらじと申つたへ侍りこれ日ほんさいしよの
 佛かく也太子かのてらのほうたうを御はいけんありてのたまはくそも
 くほうたうはかならずふつしやりのうつはもの也もつともかのたうは
 に佛しやりをあかめたてまつるへしそれ佛ほうとをきにあらす心中にし
 てすなはちちかしよろしくなんちらしんくをもつはらにして佛しやり
 をきせいすへしとけうけしたまへりよつてそかの大臣しんくをもつは
 らにして三七日のあひたけつさい一しきにしてきせいせられければ一り
 うの御しやりこんしきのくわうみやうをはなしこつせんとして飯の上に
 とひあらはれたまへりこゝに大臣かんおうのむなしからさる事をよろこ
 びて一にはしやりの真偽をわきまへ一にはまつたいのしゆしやううたか
 ひをのそかんかためくろかねの質のうへにをきたてまつりくろかねのつ
 ちをもつてこれをうちたてまつるそのかなとことつちとはことくくく
 たけやふるといへとも御しやりはそこねすあるときは御しやり鐵散の中
 につと入あるときはつちの中へ入給ふといへとも佛しやりはさらにくた
 けたまはすいよくくわうみやうをはなし給へりこのとき大臣すいきの
 なみたをなかしけるりのつほにおさめたてまつりたまひき太子かのふつ
 しやりをはいしたまひてかんるいをおさへ大臣につけていはくわれせん
 しやうにかうさんにおゐてたしやうのあひたしゆきやうせしかともふつ
 ほうきとくをあらはす事まれなりなんちはすてにくとくしやうしゆの人
 なりじこंनीごなんちとちきりをむすひて善友知識として佛ほうをおこ
 すへしこれまことに如来のしんたつなりとてかのとよらてらの五ちうの

たうのしんはしらのにしたにおさめたまひにきそもく日ほんごくは天神
 七代地神五代十二代数千万こうをふるといへとも佛ほうのみやうじをき
 かすしんむ天わうのきようより人わうはしまりてすてに二十九代せんく
 わ天わうの御ちせいにいたりて一千よねんなを佛ほうのみやうじをきか
 すしかるに人わう三十一代ひたつ天わう御治せい十三年にあひあたりて
 しやうしんのくわんをんしやうとく太子としけんして御とし十三の御と
 きわかつて日本国の中にはやまとのくにたかちのこほりとよらのさとに
 はしめてかのたうたうをたて日ほんむふつせかひにこれよりふつかく三
 ほうのかすをとよのへましくてふつほうはんしやうの国となしたまへ
 りわれらいま三ほうにちかつき一善をたくはふるもみなしやうとく太子
 むへんのをんとくにあらすやむりやうおつこうにもきゝかたきものはこ
 れ三ほうのみやうじなりそれ三ほうについてしなくありといへともこ
 とにまつだいはちうぢ三ほうのりやくすぐれたまへり三ほうとは佛一
 さいしゆしやうのために三つのたからをときてこれをあたえたまへりそ
 もくせけんのさいほうと申はくわたくのふくごうなきものこんしやう
 にまつたくかんとくしかたきものなりたまくしゆふくによつてざいほ
 うをたくはふる人もさらにこゝろやすからすゑんにもとめとうざいにた
 つぬるにゑん天にあせをなかしこつかんに水をしのき山にはやまたちう
 みにはかいそくとうのろしのわつらひにきもをけし身をつからかしさと
 にはごうせつたうとうをおそれにちやちやうほにすいくわたうそくのな
 んをうれへてしんくをくるしめ一しやうはむなしくつくるといへとも

けまうはさらにつきかたししかるにてうけんがいはいくこつせんとしてひとりめいにおもむくとき繋契のともからせんこにしたかはすいろ／＼のころをもとのへかんうんをとふらふことなしんたいわうしやくとして一りうをもつゝますしんじんくわうこつとしてはんしゆめのことしてんにあふき地にふして涙をなかせともたすくへき人も見えす地にふしてむねをたたけともきたりてあはれむへきともからもなしつねに身にしたかふもものとはこれせんせのこうなかく心にかゝる事はすなはちこうくわいのかなしみなりといへりをよそせけんのしつちんまんほう一つとしてまつたくめいとる資りやうならすしかれはほとけにんけんのさいほうをたからしたまはすこんせごせをたすくは佛法僧の三ほうを一さいしゆしやうにあたへたまへりその三ほうとはほとけのたからのりのたからそのたからこの三つすなはちこれなりまつはしめに佛ほうと申は一さいのゑさうもくさうとうの佛はさつのさうこれなりそれ一さいのふつほさつはかくへつのくわんふしきにして一せう一礼のけちゑんをもつてけんたう二世のくわんまうをたすけたまへりはいしたてまつるにめつさいしやうせんのとくありかるかゆへに一さいしゆしやうの第一のたからなりそのことはに云

第一には三ごうふぼんのさいしやうもせうめつすと也

第二のたからには一さいのきやうろんしやうけうとうこれなりほけきやうには

若有聞法者無一不成佛ととかれ又一稱南無佛皆已成佛道とものへたまへ

り大はんにやきやうしゆほんには殺害三界不陀惡趣るとき又たいきやうには設満大千火直火聞法各とゑんせつしたまへり此ゆへにこうほう大師の御しやくには一句のめうほうはおつこうにもきゝかたしいち佛のみやうしはうとんけのたとへにあらすといへりかるかゆへに三のたからの中にはもんほうくとくをもつて第二のたからとしたまへり

第三のたからには一さいのそうひくにとうこれなりかくのことく三ほうを太子はしめて御こんりうの興嚴寺にとゝのへをかんとおほしめされけるに佛のたからにはいまのせんくわうじの如来と太子八さいのときしんらくよりわたしたてまつる所のこんとうのしかの三そんとうなんせんふたひ第一のれいさうをかのてらにあかめて三ほうの中にははしめのふつほうとしたまへり一さいしゆしやうのこんせこせをたすく第一のたからすなはちこれなり第二のたからには太子六さいの御ときはくさいこくよりわたしたてまつるゝところのきやうろん二百余卷一さいしゆしやうのけんたう二世をた。けたるありかたきほうを第二のほう寶としたまへり第三のたからにははくさいこくのちうりよせんくわうじの如来の御ともとして日ほんにわたり侍りしゑさうゑんと申て二人のこうそうをかのさいしよの御こんりうのこうけんしにちうせしめたまへりしかりといへとも日ほんこくにしゆつけのなんによいまたなかりし時代なりしかは尼衆一人もなかりき一さいしよきやうの中にひくひくにのりやうしゆをつらねてそうほうとせりしかるにこの御ときははくさいこくの二人のそうしうはちうしはんへりけれともいまたそうに一人もなかりしかは三

ぼういまだとゝのほらす太子三人の御めのとをけうけしてしゆつけせしめわかつてうのしゆ生の佛たうにはれせんたつとなしたまひ侍へりき三人の御めのとそのけうみやうは月ますひめたまてるひめひますひめと申す三人のめのとを御まへにめしてけうけしたまふやうそもくをのくあこがことはにおいて一こんもそむくへからすしからは申へしとの給へり三人の御めのととは人のうへにてもいまたきかざる事にて侍れはしゆつけよとおほせをかうふる事とも遊めにもしらすしてをのくすゝんてなに事にてはんへるともきみの御ちやうをはいかてか一こんもそむきたてまつるへきと申されければたいしけうけしたまふやうそれたしやうくわうこうにも人じんをうくることまれなりたとひにんしんをうくといへとも佛ほうにあふ事もつともかたしとすいまたま／＼にんじんをうけ佛だにけちゑんなくむなくさんつのこきやうにかへりなはたからのやまにいらて手をむなくするのいましめこうくわひせんばんなにのゑきかあらざらんなかんつくに一さいの女人は花のたいかんはせたえなりといへとも五しやうのくるしみ三せうのうれへふかくして佛りきにあらすは十はうしやうとにさらにのそみかたしたしやう／＼世に三悪たうをすみかとしてちごくにしつみなはしゆつりいつれの世をかこすへきあはれなるかなゑんおうのふすまのしたにひほくのかたらひをなせともはなたいをやふれざるあひたのかたちなりかなしきかならんほうのかゝみにかけをならへしらむのちきりをむすへともつゆのいのちのきえさるほとこのなけなりさかんなるいろとまらずなをしはしるむまのことし人の

いのちのむしやうなる事さんすいにもすぎたりけふはなからふといへともあくれはまたもちかたしはやくふつだにきゑしていやしき女人五しやう三しうのたいをあらためすみやかに三十二さうのほさつの身をえ給とねんころにけうけしたまひければ三人の御めのとたちまちにほつしんしゆけけせりまことに太子御けうけの御ことはむねにあたりきもにそみてことはりしこくし侍ければ三人のぎ女たちをのく／＼いまたさかりなる花のたい月のかほはせたえなりといへともはやくしゆつけのかたちとなし給へりたゝいままでは月ますひめ日ますひめたまてるひめと申されける人／＼しゆつけののちはほうみやうをたまはりて一人をは善心一人をは禪蔵一人をは惠善となつけ給ひきかるかゆへに太子十三さいにしてこの御てらより三ほうのかすとゝのへ給ひしそのすい一なりいま此善光寺の如来はなにはのうみよりとりあげたてまつりかの御てらにあんちし給へりまことに日はん無佛せかい三ほうるふのくとなりける事しやううとく太子のしやうねん十三の御ときよりの事ともなり

IX 釈文

凡例

一 釈文の底本としたのも岩瀬文庫蔵本である。その際補入は本文として採用したが、異本傍書は採用しなかった。

一 底本に漢字で表記されているものは誤用であつても原則として採用

したが、例えば「の給ふ」「かへり見る」「身つから」等の語は改めた。

一 仮名遣についても原則として底本のままとし、歴史的仮名遣に訂する事はしなかった。

一 漢字の送りがなについては、例えば「申侍る」は「申し侍る」のように通行のかたちに補った。

一 釈文には注記を付し、前述の文明十九年写本『上宮太子伝記』（国立東京博物館蔵の模写本、天理図書館本、岩瀬文庫蔵・異本『聖徳太子本地』、国会図書館本などとの違いのうち、解釈に係わるものを示した。対校に用いたのはいずれも架蔵の紙焼き写真による。そのほか、『聖法輪蔵』諸本、万徳寺蔵『聖徳太子伝』、などをも参照した。

一 前記の諸本との異同のうち、底本によってよく意味が通り、諸本のほうに誤があると認められるものについては一々に記していない。従って、採用した対校部分に他の諸本のほうが適正と認められる場合が多くても、その事がそれぞれの本が善本である事をは意味しない。

一 対校の略号は以下のようである。

文Ⅱ 文明十九年写本『上宮太子伝記』

異Ⅱ 異本『聖徳太子本地』

天Ⅱ 天理図書館本

覚什 『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文（一）

国Ⅱ 国会図書館本

聖Ⅱ 聖法輪蔵第Ⅰ類・法雲寺本、満性寺本「聖法輪蔵」（法雲寺本のある部分はそれにより、無い部分は満性寺本によった。）

正Ⅱ 聖法輪蔵第Ⅱ類・光久寺本、聞名寺本「正法輪蔵」および浄勝寺丹山文庫「正法輪蔵」（光久寺本、聞名寺本のある部分はそれにより、無い部分は浄勝寺丹山文庫本によった。）

万Ⅱ 万徳寺蔵『聖徳太子伝』

案Ⅱ 論者の考勘した本文その他を示した。

「欠文」はその部分の記述が対校本に無いことを意味する。

「異文」はその部分の記述が対校本では別の文脈になっていることを意味する。

「該当ナシ」はその前後には類似の文があるのにその部分が無いことを意味する。

* 釈文は今の段階での読取りの私案であって、完成したものとは言えない。岩瀬文庫本はふりがなによって少しく私見と異なった文面となる部分もあったのだが、岩瀬文庫本の書写者の読取りに従った。大方の御教示を待つ次第である。また、神宮徴古館蔵の覚什『太子伝記』、日光輪王寺蔵の文保本『聖徳太子伝記』等も参照したが、未だ翻刻などの許可を得ていないため記述には加えていない。

聖徳太子伝記第一

夫おもんみれば、釈尊西天竺に出て教法を五濁に煽ぎ、摩騰東域に來たつて、遺身を末代に伝ふ。月国漢地も法祖の潤を享け、持戒も破戒も善種の化義を喜渴す。

しかるに、此葦原国は天神地祇、世を治めて、数千劫を送る。神武綏靖位を継いで、多く百歳に及ぶといへども、未だ、三法の名字を聞かず、一礼帰依もなかりき。爰に人王三十一代の帝、敏達天皇の御宇にあたつて、上宮太子この国に誕生まし／＼て、南無の称名を称へて、中州の衆生に聞かせしめてよりこのかた、佛法初めて東漸し、神明遍く感悦す。債、佛法の流布を顧るに、しかしながら太子の恩徳にあらずといふ事なし。

此故に神驗を尊み、厚恩を謝し奉らんがために聊御伝の説き難き嚴辭を和らげて、濫りがはしく新記の聞きやすき和語に記せり。たと願はくは隨喜をなして誹謗をなすことなかれ。

遍照金剛遺第 覚什

1 文「教風^{キウフ}五濁^{ゴダク}に仰^{ホウ}」

異・天「けうほうを五ちよ

くにあふき」

国「教法を五濁にあふき」

案「教風を五濁に煽ぐ」が

よいか。

2 文「法□」

異・天「ほうそ」

国「法雨」

案「そ」と「う」の仮名書

きの誤写か。

「法雨」がよいか。

3 文「毀戒」

異「きかひ」

天「はかひ」

国「破戒」

4 文「善種ノ芽ヲ萌ス」

異・天「せんしゆのけきを

きかす」

国「せんしゆのけきをきか

すといふことなし」

案、国の右当て字は後補。

「といふことなし」とし

たのは国本書写者の整合

行為か。「善種の芽を萌

す」がよいか。

5 文「三宝」

異「三ほう」

天「三法」

国「三宝」

6 文「古伝」

異「こてん」

天・国「こてん」

案「古伝」の方が後の文と

対応してよいか。

7 文、該当ナシ

異「かくきん」

天「覚斤」

国「覚什」とし「シウ」の

上に「キン」と重書き。

第一太子先生御事

抑、上宮太子は救世大悲の垂迹、随類応同の菩薩なり。その前身を尋ぬれば、震旦、衡州衡山に五の峰あり。一には持戒、二には破戒、三には恵日、四には解脱、五には般若なり。かの般若の峯、般若台に六度まで生を享け、化度を万邦に施し給へり。第六生の時は念禪法師となつて

けり。又は南岳の惠⁵禪師ともいへり。修行年積れり。化導日々に新たなり。

時に西方より金人化来す。その由来を見るに芦の一葉に乗って、西海より渡つて、衡山に來たり。これ達磨大師なり。惠⁶禪師に問つてはいはく、「和尚、此山に住する事幾許の星霜ぞや。人を化度する事幾千万と訝し。和尚山の徳をを見る。山の恩をや報ずる。」時に惠⁷禪師黙然たり。爰に達摩⁸「んではく、「これより東海に國あり。葦原と名付く。かの國の衆生専ら貪欲を業とし、殺生を功とす。かの國に至つて、和尚濟度利生し給ふべし。」と告ぐ。惠¹¹禪師答へてはいはく、「我この土の利益廿年あり、その後遷化して、かの國に至るべし。」と約す。達磨大師喜びてはいはく、「我遮つてかの國に至つて、和尚を待つべし。」とて、紫雲に乗つて、東海を指して去りぬ。即ち我が朝人王三十代、欽明天皇の即位十二年にこの國に渡り給ふといへども、結縁未だ熟せざるの間、形を隠して、卅余年なり。

さて惠¹³禪師衡山の化導尽きしかば、僧俗一万五千人の御弟子に告げてのたまはく、「我この土の化縁既に尽きぬ。遷化事終つては東海に縁あり。かの國に生じて、國王の儲の君となつて、如來の遺教を広め、じゆしやうを利益すべし。我受生の以後卅七年を経て、この聖教道具を取りに遣はすべし。それまで必ず守護し給ふべし。」とりわけ三人の御弟子の僧に仰せ含めらる。かくて「各々再会の向顔を遂げたく思はれば、かの國へ來たり給ふべし。」とて、既に遷化まし／＼き。数輩の御弟子は

悲泣に耐えざりき。日本國に降誕し給ふべし。日本國人王卅一代敏達天皇即位は壬辰、正月一日の夜、橘豊日尊の后皇女に御夢相の告あり。西方より金色の僧來たつて、后に告げてはいはく、「我に救世の大願あり。願はくは後の腹に宿借らん。」時に皇女夢の中に答へて宜はく、「抑金僧は大聖なり。女人の胎内には三十六物の不淨とこしなへてに湛へて汚らはし。いかでか聖人宿るべきや。」僧重ねてはいはく、「我濟度の願甚重也。汚穢を厭はず。不淨を嫌はざるなり。たと願はくは宿らん。」その後、「ともかくも大聖の御意たるべし。」と答へ給ひしかば、金色の僧、光明を放つて、飛んで口より入り給ひぬと、御覽じて御夢覽めぬ。現にも誠に物を吞める御心地なり。

さて暁天に皇子に向かひ奉りて、御夢の物語ありしかば、用明の皇子仰せありけるは、「世間に申し習へる事は、物を吞むと見るは、懷妊の相なり。」と宣ふ。「しかるにてあらば。聖人を孕み奉れり。」と合はせ給ひにけり。

世の常の女人、懷妊しぬれば、身も重く、起居もたやすからず苦しきあるに、これはひきかへて、御身の内も涼しく、起居輕利にして、四大柔和なり。誠に不思議に思し召す。さてこの夢想の夜は、光明宮中を照らし、明²⁰き、昼の如し。聊の曇りもなかりけり。

既に八か月を経させ給ひしかば、胎内に声あつて、歌つてはいはく、「生まれて衆生を救はゞや。煩ふ心なからしめ、法の柩を開きつゝ、菩提の道に入らしめん。」と此の歌を一日に三度、一夜に三度歌はせ給ひけり。

君も臣も奇特の思ひをなし給ふ。

抑この歌の心は、三世の諸仏弘誓願の言葉なり。又曰はく、生じて衆生を救はゞやとは、衆生無辺誓願度の心なり。後の三句は次の如し。昔悉多太子、摩耶の胎内に宿らせ給ひし時も、昼三時、夜六時の御説法有けるも、六道群類のためなりけるとかや。此太子の御歌、又もつてかくの如し。大聖の利生方便皆もつて同じ。

さて常の習ひは十か月にて生まるる事にて侍れども、その年の十月も過ぎ、霜月も立ちぬ。極月にもなりしかども、生まれ給はず。

次の年壬辰正月一日、磯城島金刺の宮にて誕生まします。母后間人皇女、いさ／＼御退出の御事ありしに、御厩の口にて御誕生あり。西方より金色の光明照耀して、異香宮中に芬郁す。侍女采女各々仰天騒動して、東西に騒ぎしに、一の御厩に立られたりける葦毛の御馬、膝を折つて三度嘶へけり。此馬は即ち達摩大師の変作なり。太子の誕生御約諾有りし事なるによりて、達磨、太子の御誕生の遅き事をいかにやと、勧め給ひしに、この馬の声を聞き召して、則ち御誕生なりぬ。これによつて厩戸の皇子と名付け奉る事、この御契によつてなり。

さて侍女采女抱き奉り宮に入れ奉る。后また安宿あいの内に恙なく、皇子驚きて局、侍従のあへるに、庭にたちまちに赤く黄なる光あつて、西方より来たつて、殿の内を照耀する事、やゝ久しくして止みぬ。

敏達天皇なを皇子の宮にすはれり。たちまちにこの異を聞きて、乗り物に命じて飛んでよろほひてんとにをよびて、又照耀する事あり。天皇

大きにことなつて群臣に勅して宣はく、「この稚児は後に必ずなを世に異なる事あらん。」即ち有司に命じて大湯き若湯きを定めて、沐浴して抱きあげて、天皇纏褌をもつてこれを受けて皇后に授く。皇后父の皇子に授けて、皇子を後に授く。后懷を広げて身体を受くるに甚だ香ばしし。三日の夕べには天皇宴を設けて物を群臣に賜ふ。七日の夕べは皇后宴を設けて物を賜ふ。宮、大臣以下あいづぎて、貢ぎ物を献ず。これを称して産養ひといふ。乳母三人を定め、付け奉り給ひ、その中一人は大連の娘なり。いづれも名字を定めらる。一人をば日益姫、一人をば天照姫、一人をば玉照姫と名付く。かくて湯も世の常の水にては穢らはしとして、新たに三の井を掘らせらる。一をば東井と名付く。一つをば赤染と名付け、一をば千歳と名付く。この井は殊勝の靈水甘き味はひあり。一は湯にて湧出す。此の三の井の水をもつて御産湯を浴びせまいらす。御乳母どもなのめならずもてなし傳き奉る事、掌の内にも宝珠の如し。

さて三人の御乳母自然に不思議の歌を作りて、歌をもつて太子を慰め奉る。その歌に曰はく、「ねんぜんほうしこほうしやどれ／＼こほうし、うめるこのしたにはねきとう／＼のさふらふそ」といふ歌を歌ふ。此の歌の心は、念禅法師とは太子の先生の御名なり。古法師とは過去の一生まで修行して、薰修功積れり。かるがゆへに古法師といふ。宿れ／＼とは、此の国に生を受けて、衆生済度すべき言葉なり。称宜とう／＼とは、この太子は大権現のせうびなるゆへに、日本国中の大小の神祇、太子を守護し奉り、称宜とは神に仕ふるものなるがゆへにとなり。この歌を末

代には誤りて、「ねん／＼ほうこほうしやとれ／＼こほうし、むめの木のしたにはめきらききの神のさふらふそ」といひなせり。これは誤りなり。すべて天代、入胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃の八相、乃至幼稚の御有様悉く釈尊、古に変わる御事なかりき。希代の不思議なり。さてもかやうにめでたきなかに、一つの嘆きあり。太子誕生の後、右の御手を捧げて、開く事なし。玉に瑕の風情かなと、御乳母たちこれを嘆きあへり。

- 1 文「先生御事」
異「ぜんしやうの御事」
天「先生御事」
国「前生の御事」
- 2 文「先身」
異「せんしん」
天「ぜんしん」
国「前身」
- 3 峰の名を、
文「紫蓋、花蓋、恵日、解脱、般若」
異「しがひ、はかひ、ゑ日、けたつ、はんにや」
- 4 文「万郊」
異「ばんほう」
天「ばんぼう」
- 5 文「思思禪師」
異「ゑいぜんし」
天「ゑい禪師」
国「慧思禪師」
- 6 文「思思禪師」
異「ゑぜんし」
天「ゑぜんし」
国「慧思禪師」
- 7 文「思思禪師」
異「ゑぜんし」
天「ゑぜんし」
国「慧思禪師」
- 8 文「ス、メテ」
異「すゝむて」
天・国「すゝんで」
- 9 文・国「行」
異「こう」
天「こう」
- 10 文・国「業」
異「けう」
- 11 文「思思禪師」
異「ゑぜんし」
天「ゑぜんし」
国「慧思禪師」
- 12 文「機縁」
異「けちえん」
天「けちえん」
国「きえん」
- 13 文「思思禪師」
異「ゑぜんし」
天「ゑぜんし」
国「慧思禪師は」
- 14 文・天・国「衆生」
異「しゆしやう」
文「后ハシヒトノ皇女」
- 15 文「后ハシヒトノ皇女」
異「こうくわう女」
天「后皇女」
国「妃間人皇女」
- 16 文「宿〇ン」
異・天「やとらん」

- 16 文「至リ」
異「いへり」
天「のたまふ」
国「申ならはせり」
案「いへり」がよいか。
文「四大調和」
異「したひにうわ」
天「四たひにうわ」
国「支那^{シナイ}柔和」
文「アタカモ」
異「あたか」
天「あかさ」
国「あかき事」
文「四弘誓願」
異「こうせい^{こうせい}くわん」
天「弘誓願^{こうせいがん}」
国「弘誓願^{こうせいがん}」
- 17 文「トコシヤエニ」
異・国「とこしなへに」
天「とこしなへてに」
文「聊」
異・天・国「いさゝか」
文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 18 文「やとらんと」
文「ツキテ」
異「つき」
天「次^{つぎ}」
国、該当ナシ。
文「聊」
異・天・国「いさゝか」
文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 19 文「ししたひにうわ」
天「四たひにうわ」
国「支那^{シナイ}柔和」
文「アタカモ」
異「あたか」
天「あかさ」
国「あかき事」
文「四弘誓願」
異「こうせい^{こうせい}くわん」
天「弘誓願^{こうせいがん}」
国「弘誓願^{こうせいがん}」
- 20 文「ししたひにうわ」
天「四たひにうわ」
国「支那^{シナイ}柔和」
文「アタカモ」
異「あたか」
天「あかさ」
国「あかき事」
文「四弘誓願」
異「こうせい^{こうせい}くわん」
天「弘誓願^{こうせいがん}」
国「弘誓願^{こうせいがん}」
- 21 文「ししたひにうわ」
天「四たひにうわ」
国「支那^{シナイ}柔和」
文「アタカモ」
異「あたか」
天「あかさ」
国「あかき事」
文「四弘誓願」
異「こうせい^{こうせい}くわん」
天「弘誓願^{こうせいがん}」
国「弘誓願^{こうせいがん}」
- 22 文「ツキテ」
異「つき」
天「次^{つぎ}」
国、該当ナシ。
文「聊」
異・天・国「いさゝか」
文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 23 文「聊」
異・天・国「いさゝか」
文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 24 文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 25 文「变化」
異「へんさ」
天「変作^{へんさく}」
国「変作^{へんさく}」
文、異文
異「きさきまたあんしゆく
あい^{あい}のうちにつゝかな
く」
天「きさきまたあんしゆく
あひ^{あひ}の内にてつゝかなく」
国「妃^きもまたつゝかなく幄^{わく}
内^{うち}に安宿^{あんしゆく}し給て」
寛文「妃^きも又つゝがなく幄^{わく}
の内に安宿^{あんしゆく}します」
案「安宿幄内」という漢文
- 26 脈の直写か。
文・国、異文。
異「つほね侍従^{もじ}のあへるに
にわにたちまちにあかく
きなるひかりあつて」
天「つほね侍従^{もじ}のあへるに
庭^{にわ}にたちまちにあかく
なるひかりあつて」
案、なにか祖本に錯簡が存
在したか。
文・国、該当ナシ。
異「とつてころほひてん
とにをよひて」
天「とんでよろほひ出むと
にをよひて」
文、異文。
異「おほきにことなつて」
天「大きにことなつて」
国、該当ナシ。
文、異文。
異・天「おほゆきわかゆ
- 27 脈の直写か。
文・国、異文。
異「つほね侍従^{もじ}のあへるに
にわにたちまちにあかく
きなるひかりあつて」
天「つほね侍従^{もじ}のあへるに
庭^{にわ}にたちまちにあかく
なるひかりあつて」
案、なにか祖本に錯簡が存
在したか。
文・国、該当ナシ。
異「とつてころほひてん
とにをよひて」
天「とんでよろほひ出むと
にをよひて」
文、異文。
異「おほきにことなつて」
天「大きにことなつて」
国、該当ナシ。
文、異文。
異・天「おほゆきわかゆ
- 28 脈の直写か。
文・国、異文。
異「つほね侍従^{もじ}のあへるに
にわにたちまちにあかく
きなるひかりあつて」
天「つほね侍従^{もじ}のあへるに
庭^{にわ}にたちまちにあかく
なるひかりあつて」
案、なにか祖本に錯簡が存
在したか。
文・国、該当ナシ。
異「とつてころほひてん
とにをよひて」
天「とんでよろほひ出むと
にをよひて」
文、異文。
異「おほきにことなつて」
天「大きにことなつて」
国、該当ナシ。
文、異文。
異・天「おほゆきわかゆ
- 29 脈の直写か。
文・国、異文。
異「つほね侍従^{もじ}のあへるに
にわにたちまちにあかく
きなるひかりあつて」
天「つほね侍従^{もじ}のあへるに
庭^{にわ}にたちまちにあかく
なるひかりあつて」
案、なにか祖本に錯簡が存
在したか。
文・国、該当ナシ。
異「とつてころほひてん
とにをよひて」
天「とんでよろほひ出むと
にをよひて」
文、異文。
異「おほきにことなつて」
天「大きにことなつて」
国、該当ナシ。
文、異文。
異・天「おほゆきわかゆ
- 30 文、異文。
異「わうしをきさきにさつ
く」
天「皇子をきさきにさつ
く」
国「また豊日尊^{トヨヒノミコト}にさつけ
る、尊また皇妃^{ミカハヒ}にさつ
け給ふ」
案「これ」字の脱か。
文・国「月益姫^{ツキマスヒメ}」
異「あまてるひめ」
天「天てるひめ」
文「赤染^{アカシ}」
異・天「あかそめ」
国「赤染井^{アカシイ}」
文「千歳^{チサイ}」
異「千さい」
天「せんさい」
国「千歳井^{チサイイ}」

34 文・国「冷水」^{レイスイ}

異「れいすい」

天「れひ水」

35 文「先生」^{センシヤウ}

異「ぜんじやう」

天「せんしやう」

国「前生」^{ゼンシヤウ}

36 文・国「古法師」^{コハフシ}

異「こほうし」

天「小法師」^{コハフシ}

37 文「七生」^{シヤウ}

異「いつしやう」

天「一生」^{シヤウ}

国「一生」^{シヤウ}

38 文「垂跡」^{スイシヤク}

異「せうひ」

天、欠文

国「せうび」

39

文「入胎、出胎、降魔等の瑞相」^{シュウタイ、シュツタイ、カクマ等のミサイサマ}

異「てんたいにつたいしゆ

つたいしゆつけかうまし

やうたうてんほうりん

うねはんの八さう」

天「天代日代しゆつたいし

ゆけかうませうたうてむ

ほうりんにうねはんの八

さう」

国「天胎、入胎、出胎、出

家、降魔、成道、転法輪、

入涅槃の八相」

太子二歳の御年

二月十五日の暁、玉照姫に密かに告げてのたまふやう、「阿児に大きな誓あり。今宵明けなば、明旦に天下に披露せばやと思ふ事あり。汝ら相構へて／＼騒ぎする事なかれ。」その時玉照姫、太子の御深意をも

覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文(一)

覚悟せず申すやう、「さやうの御大事を披露あらん事を、いかでか帝に奏進なくしては、たやすく我らばかりにて許し奉るべき。」と申しければ、此の事さては我大願に障礙出来りなと思し召して、「誠に阿児がいへるに非ず。さる事あるべからず。我も御寝ならむ。汝も寝よ。」と仰せられしほどに、玉照姫、誠にやと思ひてまどろみぬ。

太子は思し召すやう、「夜も明けなば、此の事天皇聞こし召され宮中にも風聞あらば旁々障りとなりぬべし。未だ夜も明けぬほどに、我大願を遂げばや。」と思し召して、御乳母たちにも知らせず、密かに御寝所を立ち出させ給ひて、御衣なども召されば人知るべきあひだ、たと夜召されしあかつき御袴のまゝにて御出あり、東方に向つて左右の御掌を合せて、「南無佛」と三度称へさせ給ひて、誕生よりこのかた開かせ給はざりつる右の御手を左右に合掌して、「南無佛」と称名して、これを開かせ給ひしに、如来の御舍利一粒を御所持ありけり。

さて南無の御声に驚きて御乳母たち起き騒ぎて見奉れば宮中宮外光明照朗せり。太子は御袴ばかりにて御膚を現し、東に向かひて、御手に物を持ち給へるより、光を放つて世界を照らす。この無佛世界に初めて三法の名字を称へ初めて衆生の耳に触れさせ、利益を得せしめんと思し召しけるあひだ、二歳の中旬は時分常住たるによつて、これを開き初め給ひけり。又佛法東漸のいはれを表します也。今法隆寺御舍利は南無仏の時の御舍利なり。

- 1 文「相構^{ソウコウ}テ」
異「あひかまいてく」
天「かまえてく」
国「あひかまへて」
- 2 文「只^{ただ}□ヘルソ」
異「いはへるそ」
天・国「いへるにあらず」
- 3 文「赤^{アカ}キ」
異・国「あかき」
天「あかつき」
- 4 文「照^{シヨウ}耀^{ヤウ}」
異・国「せうよう」
- 5 文「三^{さん}宝^{ほう}」
国「三宝^{さんほう}」
異「三^{さん}ほう」
- 6 文「二^に月^{げつ}」
異・天「二^にさい」
- 7 文「時^ジ分^{ぶん}正^{せい}中^{ちゆう}」
異「じぶんしやうちう」
天「自分^{じぶん}じやうしう」
国「しぶんじやうちう」

太子三歳

春三月三日、皇子、母后、侍女、采女斎整として、太子を抱き奉りて、宮¹うの後園に出御なつて、桃花の御遊宴ありて、皇子自ら桃花と、又傍らにありける松の葉と二つ折りて、太子に申させ給ふやう、「松の葉と桃花とはいづれか愛し思し召すや。」と問ひ奉り給ひしかば、太子答へて申させ給ふやう、「桃花はこれ²一旦^{いつたん}栄木、松の葉は千年の貞木なり。しかる³ひたた松の葉を愛すべし。」と仰せられしかば、皇子も皇后も御感に耐えざりき。

- 1 文「宮^{みや}ノ」
異「みやう」
天「みやう」
国「宮^{みや}の」
- 2 文「一^{いち}旦^{たん}ノ」
異・国「一^{いち}たんの」
天「一^{いち}たん」
- 3 文「然^{シカ}間^{ルイタ}」
異「しかるあいた」
天「しかるあひた」
国「しかる間」
- 4 案、「御」字衍字と認め一字削除。

太子四歳

父の皇子の宮、磐余池辺双槻宮、御舎兄、久米王子、丸子王子、筒島王子を始め奉りて、太子もその中に交はり御遊戯ありけり。いさゝか御声高くして、御靜論ありけるに、父の皇子聞召されて、御身づから杖を執つて王子たちの御中へ立ち向かひ給ひしに、余の王子たちは皆散り散りに逃げ隠れさせ給ひけるに、太子一人逃げ給はず、御肩の御衣を脱ぎ、御膚を願して膝まづきて、皇子に向はせ給ふ。その時父の帝杖¹側めて、太子に向ひ奉り、宣ふやう、「余の王子たちは朕に恐れをなして、皆逃げ隠れ給ふに、太子一人なんぞ恐れずして向ひ給ふや。」時に太子いとなき御心に申させ給ふやう、「我過つて戯²靜を過²ごして、父帝の御怒りを被³ふり、これ不孝の至りなり。父母に不孝のものは、天には梵天帝釈もこれを守護せず。地には堅牢地神も地を戴かずといへり。しかれば

我天に階立てても登るべからず。地に穴掘りても隠るべからず。この故に我父の御杖を受けて御怒りを休めんと思ひしが故に向ひ奉る。」と内外の教戒少しも漏るる事なく申させ給ひしかば、皇子も御杖を捨てて御涙に咽び、とかうの御返事もなかりけり。

1 文「杖ヲ」

異・天「つえを」

国「杖を」

2 文「戯咲」

異・天「けしよう」

国「戯靜」

3 文「蒙ふる」

異・国「かうふる」

天「かふむり」

4 文「教戒」

異「けうがい」

天「けふかい」

国「教誡」

太子五歳

太子御伯母推古女帝后に立ち給ふ。大臣公卿拜礼の儀式を執り行なひしに、太子密かに出御なつて、諸卿の御前に進んで、列に立つて奉拜の儀式をなし給ふ。時に三人の御乳母、これを見奉りて、急ぎ宮に入れ奉りて申すやう、「太子は我が君の儲の君にて、十善の宝位に備はり給ふべき東宮にておはしますに、なんぞかろしく大地に御足を下ろし給ふや。大國の風儀はいかゞ侍らん。我が國の習ひは國のくら位に備はらせ給ふ人は、直に地を踏む事なし。いかゞはせん。」と嘆き侍りしに、

太子のたまはく、「汝らの申す所誠にそのいはれあり。阿児もその義を知らざるにはあらず。しかりといへども我國の位を継ぐ事あるべからず。此敏達天皇、世を知ろしめさん事十四年なるべし。その次には我父の天皇位を継ぎ給ふべし。それもわづかに二か年の内、十か月の間に崩御なるべし。その次に我御叔父崇峻天皇御即位あるべし。それも久しからずして、人のために疾害せられ給ふべし。

その後にあた今の御伯母の後、位に就いて、女帝として三十六年の御治世あるべし。阿児はこの帝の御時、摂政の位を承つて帝の御政道を輔け奉るべき故に、未来は我君主たるべき故に拝み奉るなり。」とこまやかに御物語ありしほどに、三人の御乳母もことほりといひ、未来の御事を明らかに仰せありしかば、奇異の思ひをなせり。

さてこの時、百済國より先生の御弟子、学阿博士といふ外典の学者渡れり。太子の外典の御師匠として孔子、老子の教へを授け奉り、予て「筆墨を我に献ずべし。」とて、書芸を習ひ学しおはします也。この時までは日本國に墨を擦り、筆を執る芸もなかりき。たゞ繩を結び、木を刻み、政をなしけるに、この太子の御代に初めて筆墨の技起これりとなり、実に内外の舟楫、人天の師範にておはしませり。かの学阿博士と申す唐人は、日本國にては五徳の博士と号せりと云々。

1 文「王位」

異「ほうゐ」

天「ほうゐ」

国「宝位」

2 文「国ノ位ニ」

4 文「先世」

異・天「国の位に」

異・天「せんしやう」

国「帝位に」

国「前生」

3 文「位ヲ継テ」

5 文「サツケ奉リ」

異「位をついて」

異「さづけ奉り」

天「位に付て」

天「さつけ奉り」

国「位につき給て」

国「まなび給へり」

太子六歳

十月の頃。百済国より法花、勝鬘等の經論二百余巻を渡さる。天皇に奏聞を経て、これを読み明かさ給ひけり。如来の聖教の日本へ渡る事、この年に始まる也。

太子七歳

時の帝に奏し給ふやう、「去年百済より渡るところの經論二百余巻、御許しを蒙りて、これを披見せばやと存じ候ふ。」と奏し給ふに、左右なく許し給はず。「いかでかたやすく大聖の教えを悟り給ふべきや。」時に太子は天皇に申させ給ふやう。「君は知ろし召さじ。我は震旦の衡州衡山に六生まで住処を占め、此の如来の遺教を修学せり。我今この国に生を受けて、七か年に及ぶといへども、憶持不忘の徳を具足せるがゆへ

に、更に忘れず。しかるべきは披見すべし。」と重ねて申させ給ひしに、先生の御事、この時初めて、往因を説き給ひしかば、天皇も諸卿も不思議の思ひをなしおはします。その時、ともかふも御計らひたるべしとて、宮中潔祭して、經論を披見し講読おはします。太子天皇に申させ給ふやう、「この經論を披見し候ふに、軸々異なりといへども、凡その所説、諸惡莫作、諸善奉行の理を宗旨とせり。しかれば国々の殺生を禁断しますすべし。かるがゆへにかの日時に月の六斎、年の二季に殺生を止め給ふべし。そのゆへにかの日時に一切衆生の善惡の行を記して、黒白の札に載する時分なり。天には梵天、帝釈これを記し、地には閻魔法王これを記す。かるがゆへに月の六斎、年の二季にはこれを止むべし。二季とは二、八月の彼岸なり。これは昼夜斎等にして、時分の正中たるゆへなり。この時分に国に殺生を断じ、人に戒を授けしめば、天子壽命を延べ、国土に殃災なかるべし。」と申させ給ひしほどに、即ち綸旨を下され、国土に斎日の殺生禁断せられけり。

1 文「然ヘクハ」

国「なし給ふ」

異「しかるへくは」

3 文「結界シテ」

天「しかるへきは」

異「けいかひして」

国、該当ナシ。

天「契祭して」

2 文「成シマシマス」

国「潔斎して」

異・天「なしおはします」

4 文「講讀シマシマス」

異「かうとくしおはします」

す

天「かうとくをはします」

国「講読し給」

5 文「其故ハ」

異・天「そのゆへに」

国「そのゆへは」

6 文・国「業」

異「けう」

天「きやう」

太子八歳

冬十月、新羅国の大王より弘賀、榮賢と申す臣二人を召し、勅して金銅の釈迦の三尊を、我朝人王三十一代の帝敏達天皇に奉送し給ひしかば、君も臣も同じくともに御感あつて、件の佛像を崇むべきの旨、殿上に御清談あるとき、物部守屋の大臣進み出て、異議を申さるゝやう、「抑我朝日本国は、神明の初めて創り出し給へる国なるが故に、神明国と名付けて、貴賤上下の諸人、神の生育し給へば、神の氏子なり。劫初²よりこのかた、此国の衆生、神事をもて国の政とす。しかれば則ち一天の風和らかにして、四海波静かなり。しかるに今他国の異形を崇め給はゞ、定めて我朝の神明の靈荒れて、国中に自然に災難をなし給はん事、疑ひあるべからず。」と申して座を立ち、宮中に退出仕りけり。これぞ守屋の大臣仏法を違逆し、太子に敵対し奉り給ふ初めにて侍ける也。時に太子、かの釈迦如来の凡夫の昔、正覚を成じ、滅後の利生を説き給へば、上一天の君より、下諸臣下に至りて、一代教主、大聖釈迦如来の因位果後の徳を、明らかに太子これを説き給へり。「凡そ、此の佛は今度初め

て正覚を成ずるにあらず。既に五百塵点劫の古、三阿僧祇劫の間、大功の修行円満して、久成正覚の古佛なりといへども、従果向因の利生をもつて、世々番々に娑婆に出世して従因至果の正覚を称へ、三有の群類を度し給へり。かるがゆへにこの度正覚をとり、此朝より十万余里の湮浪を隔てて中天竺の王宮に御誕生あつて、御名をば悉達太子と号す。十善万乗の位に備はり給ふべき儲君の御身なりといへども、七歳にして発心し、十九にして出家し、三十にして成仏し給へり。一代八万の教法を説き給ひしかば、在世、滅後を嫌はず、有縁無縁の者、龍畜鬼神をしなべて未来成仏の記別に預かり給ふ。遂に在世八十年の化儀事終つて、悉く入滅し給ふ時、滅後の衆生を利せんがために、御身を金銅の聖容に写し留め給へり。しかるに如来滅後の後、天竺に留まつて一千余歳、生身に代つて利益を施し給ふ。その後震旦、新羅国に渡り給ふ、四百余歳なり。阿児先生に衡山において崇め奉る多生の御本尊、かくのごとく天竺、震旦をしなべ国王、大臣一心に崇め奉る所の南瞻部提第一の靈像なり。しかるに今、仏法東漸のいはれにて、我朝に來り給へり。劫初よりこのかた、この国の衆生、神明の利生のみを尊とみ、本地佛菩薩の利益を知らず。抑我朝、一切神明の本地を尋ねれば、皆往古の如来、久成の薩埵なり。時により、所に従い、仏菩薩と現れ給ふ。神明の垂迹と現じ給ふ。しかれば即ち西天上代の機根のためには、仏菩薩の形を現じ、これを度す。未来成仏の記別を授け、東土末代の衆生のために、惡鬼邪神の形を示し、因果を信ぜざる邪見の衆生を降伏し、無為真実の仏道に入れ給へ

り。もとより神明と仏、たゞ氷と水との如し。影と形に相似たり。いまもつて差別なし。しかれば即ち君も臣ももろともに、一切神明のその本地仏菩薩の、利生のために悉捨多生曠劫にも逢ひがたき仏菩薩の像也。」と太子懇ろに説き給ひければ、一天の君を始め奉り、群臣一同に信仰の思ひをなし奉りけるなり。

その後大和国に大伽藍を建て、元興寺と名付け、かの釈迦の三尊を安置し奉り給ひけるなり。これ即ち如来の滅後に一切衆生のために釈尊の真るいを残し留め給ひける也。

さてもかの仏法最初の釈迦の像大和国元興寺の金堂に安置し給ひけるを、太子御入滅の後、五十年の頃に及び、人王三十九代、天智天皇の御宇に及び、今の一人の人の御先祖大織冠の御嫡男淡海公、南都に興福寺を氏寺に建てたる時、もとよりの元興寺かの尺迦の三尊を迎へ奉りて据へ奉られければ、かの釈迦の霊像則ち託宣してはいはく、「我仏法東漸の願力によって、粟散辺土のこの国まで来たれり。かさねて猶東方に向はんと欲するもの也。なんぞ西方に向はせ奉るや、早く東方に向はせ奉れ。」と託宣し給へば、これによつて昔より末代に至るまで、今に興福寺の東金堂の後門に東向きに据へ奉り、仏法最初の釈迦の像と申すは即ちこれなり。

1 異・国「ちよくしとして」

聖「勅使」^{シテ}

天「ちよくして」

正「勅使」^{シテ}

2 異・天「こつしよより」

国「劫初より」^{コツシヨ}

聖・正「從二劫初」^{コツシヨ}

3 異「あんにくわこのとくを」

天「いむくわに此しゆとくを」

国「因位果後のくどくを」^{インイワケノコトク}

聖「因位果後功德」^{インイワケノコトク}

正「因位果後功德」^{インイワケノコトク}

4 異・天・国「をしなへ」

聖「押並テ」^{オシナヘ}

正「押並テ」^{オシナヘ}

5 異「なんゑんぶたい」

天「せんふたひ」

国「南閼浮提」^{ナンカクフテイ}

聖・正「南閼浮提」^{ナンカクフテイ}

6 異「佛はさつとあらわれ給ふ」

ふ

天「佛はさつとあらはれ給ふ」

ふ

国「仏菩薩あらはれ給」

聖・正「顯二仏菩薩」^{エンニハツサツ}

7 異「是をどす」

天「是をとす」^シ

国「これを度す」^シ

聖・正「度之」^シ

8 異「ぶつたと」

天「仏たど」^{ハツタド}

国「仏陀とは」^{ハツタハ}

聖「仏陀ハ」^{ハツタハ}

正「仏陀」^{ハツタハ}

9 異「しんるいを」

天「しんるひを」

国「真影を」^{シンエイ}

聖「真影ヲ」^{シンエイ}

正「真影」^{シンエイ}

10 異「もとよりのくわんこうじ」

じ

天「もとよりの元興寺の」^{ゲンキョウジ}

国「元興寺の」^{ゲンキョウジ}

聖・正「自二本元興寺」^{ジニホンゲンキョウジ}

内侍所の事

我朝開闢の初めに、天照太神宮の御本地の事、悉なくも太神宮高間が原におゐて、三面の銅鏡の面を末代の氏子に我本地の御体を知らしめんと、神明御身づから、我御体を銅の鏡に写し留め給ふに、神の仕業、心の如くましますべけれども、思ふやうに御本地写させ給はざりければ、第一番にあたつて、現れ給ふ御正体の御鏡を紀伊の国、吉野川に投げ入れ奉り給へり。紀伊の浦の海人網に掛け引き上げ奉る。今の日前の宮これなり。第二番に写し留め給ふにも御心の如く現れ給はざりければ、伊勢の海に捨て奉り給へり。伊勢の国鏡の宮これなり。伊勢太神宮の御正体にておはしき。第三番に御正体思ふやうに現れ給ふをば、百王一百代の御重宝として、内裏の温明殿にまします内侍所の御鏡これなり。抑天照太神宮の選びて現れ奉り給へるところの、内侍所の御鏡の面に映し現れまします真実の御正体と申すは、今の聖徳太子の御本地の観音にてまし／＼きと云々。

太子九歳

夏六月の頃、一つの奇特侍り。津の国難波の浦の州崎に家を造り、心をすさまじし、歌を詠ずる人侍り。この人我朝に初めて今様を詠じ出してける人なり。その姓名をば土師のむら八島と申けるなり。わざと海辺を住所として昼はひめもずに歌ひ暮らし、夜は夜もすがら歌ひ明かし、松

吹く風に琴を調べ、かの歌の調子とこしなへに、岸打つ波を鼓とし、此歌の音曲を助け、州崎の千鳥の友呼ぶ声までも、心を澄まし、遊曲の砌なり。かくの如く、吹く風立つ波につけて、一切を眼に見、耳に聞く類、いづれも流水の弁舌滞りなし。

面白く今様を歌ひ侍りけるその声妙にして、誠に面白く侍りけるあひだ、夜る／＼天より変化の者天下り、その色赤色にして、左右のまなはこ明星の如し。光を放つ鬼神にて侍りけり。八島が家の瓦の上に居て、歌の曲を聞き侍りける。鬼神歌の曲を聞き、感に堪えず、共に声を出して歌ひ侍りければ面白き事譬へんかたもなかりけるなり。天の明け方には掻き消すやうにうち失せ侍りけり。人を出しその行方を見せしめければ光を放し、難波の浦より南へ三十余丁、虚空を飛んで住吉の浦の海の中へ飛び入り侍りき。

此鬼神さま／＼に禁忌の歌を歌ひ侍りけり。八島怪しく思ふやう、此の事いかさまにも国王大臣とうの御大事の物怪いけと思ひて、内裏に参り此の由を奏聞す。時の帝敏達天皇諸臣下を召し、「そも／＼前代先王の御代にもかやうの事侍りけるや、確かに例文を引き勘へ申さるべし。」と御尋ねありければ、各々先規の例文を引かるといへども分明ならず。その時天皇、誠や聖徳太子こそ未然方來の徳を備へ、一切の事におゐて、明らかに知ろし召す御事なれば、此の事太子に伺ひ奉らんと申し召して、太子に尋ね奉り給ひければ、太子誠に鏡に懸け曇りなく、勘奏し奉り給ふ。「抑これは空に住む熒或星と申星にて侍なり。かの星は下界の人間

にもし戦兵乱起り、飢渴、不熟とうの災難出現せんとては、かの星童子の形を現じ、人間に天下り、世間の諸々の小童子の中に相交はり、未だ来たらざる前に、人の善惡の事を謡に作り、披露し侍るものなり。天に口なし、人をもつて囀らしむといへり。もつての外禁忌の歌どもを歌ひ侍る。天下の乱れ、日本の大難出来し侍るべし。一定東方より千島の夷、我朝に攻め来たつて、王位に望みをなし侍るべし。明年の春三月の中、よく／＼御慎みあるべし。」と御奏聞ありければ、君も臣も東夷か兵難を恐れて、太子の御知恵のやむごとなき御事を尊み奉り給ひ、悉く通達し給ふのみならず、かくの如く天の変化をなす天文地利の冥道をもよく鏡に懸け明らかに相し給ひける御事、有難さよと万人尊とみをなし奉り給ひけるなり。

- | | | | | |
|--------------------------|-----------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--|
| 1 異・天「心をすまし」 | 3 異・国「てうしとし」 | 5 異「まなこは」 | 7 異「ひかりをはなち」 | 9 異「かぐみにかげ」 |
| 国「心をすましけり」 | 天「てうしとしなへに」 | 天「まなこ」 | 天「ひかりをはなし」 | 天「鏡にかげ」 |
| 聖「澄 ^{ハシ} 心」 | 聖「為 ^{ハシ} 調子」 | 国「まなこは光かゝやき
て」 | 国「光をはなち」 | 国、異文。 |
| 正「澄 ^{ハシ} 心」 | 正「為 ^{ハシ} 調子」 | 聖「眼ハ」 | 聖「放 ^{ハシ} 光」 | 聖「懸 ^{ハシ} 鏡」 |
| 2 異「はしのむら八島」 | 4 異「よる／＼」 | 正、該当ナシ。 | 正、該当ナシ。 | 正、該当ナシ。 |
| 天「土師のむらやしま」 | 天「夜よる」 | 8 異「御大事のもつけいけと
おもひて」 | 8 異「御大事のもつけいけと
おもひて」 | 10 異「太子の御ちゑのやんこ
となき事をたつとみ奉り
給ひこと／＼くつうたつ
したまふのみならずかく
のことく天のへんけをな
す天文地利のみやうだう |
| 国「土師連 ^{ハシ} 八島」 | 国「よな／＼」 | 天「御大事 ^{ハシ} のもつけいけと
思もひて」 | 天「御大事 ^{ハシ} のもつけいけと
思もひて」 | |
| 聖「土師ノ連 ^{ハシ} 八島」 | 聖「夜々」 | 国「御大事」 | 国「御大事」 | |
| 正「土師之連八島丸」 | 正「夜々」 | | | |

もよくかゝみにかけあきらかにそうし給ひける御事ありがたさよと万人たつとみをなし奉り給ひける也」

天「太子の御ちへのやむ事なし御事をたつとみ奉り給ひことくくつうたつし給ふのみならず彼ことく天のへんをなす天文地利のみやうをもよく鏡に懸明らかにそうし給ひける御事のありかたさよと万人たつとみをなしたてまつり給ひけるなり」

国「さてもやんことなき御事かな内典外典に通達し

熒或星の歌の事

かの変化の者主歌を面白く聞き取りて、共に歌ひ侍りけるほどに、鬼神の本性の声、恐れ侍りければ、主の八島今様の曲を留め侍りければ、

給ふのみならず天文地理をあきらかに鬼神変化の冥道とも察し給ふ事の有りかたさよと太子の御ちゑのほどをたつとみかんじ申されけり」

聖「太子ノ御知恵ノ無止事御事奉貴給ヒキ、抑、此君ハ、内典外典ヲ悉ク通達給ノミナラス、如此天ノ為ニ反化ニ天文地理之冥道マテモ、能ク懸鏡、明達給ケル事ノ難レ有サヨト万人奉成ニ貴給ケリ」

正「太子之御智恵之無止事御事奉貴給ヒキ」

鬼神我身の科なりと思ひ出て、今一度主の歌の聞かまほしさに、通力自在の者にて侍りける、己が本性の恐れなる声を引き替へて、妙なる声にて面白く歌の曲を詠じ侍りければ、主心とけて感に堪えず、共に歌ひ侍りけるに、東西澄み渡りて、面白かりけるなり。八島も共に歌ひ侍りける。二人同音に歌ひ侍りければ、面白きともいふばかりなし。八島、かゝる変化の物に言語を交へ悪しかりなん。かの交名住所を今様に歌ひ相尋ねばやと思ひて、夜更け人静まりて、五更の天に及びて、時の調子を取り歌ひ侍る。その曲にいはく、

我宿の薨に作る声は誰確かに名乗れ四方の草ども

と、三返ばかり押し返し面白く歌ひ侍りければ、かの変化の者、その返歌に己が身の交名住所を悉く明らかに歌ひ現し侍りける。その歌にいはく、

天の原南に巡る夏見星豊聡に問へ四方の草ども

これを三返ばかり歌ひ、天も明け方になり侍りければ、難波の浦より三十余町虚空を飛び、住吉の浦の海中に沈み侍り。

太子奏して宣ふ、「抑、此変化の者は空に住む熒或星と申す星なり。

それ天に五星あり。各々五方に住す。五性の位を表す。その色五色なり。東方には歳星と申す。四季の中には春三月を領す。五性の中には木を掌る星なり。五色の中にはその色青きなり。甲乙也。南方には熒或星と申す。夏三月を領す。五性の中には火を掌る。その色赤き也。丙丁。西方には太白星と申す。秋三月を領す。五性の内には金を掌る。その色白き

なり。戊己。北方には震星と申す。冬三月を領す。五性の内には水を掌る。その色黒き也。庚辛。中央には鎮星と申す。中を領す。五性のなかには土を掌る。その色黄なり。壬癸。此の五星天下を治め、国土を守る物也。しかるに天下に災難起こらんとては、此星様々に変化して、先立ちてこれを示すものなり。」

時に「なをもつてかやうには奏したまふもの也。」太子重ねて勅答申し給ふやう。「かの星の歌の曲にて知り侍り。天の原南に巡る夏見星豊聡に問へ四方の草どもとは我朝の大和言葉に空をば天の原と詠める故に我は浦南の方に住むと答へ侍る。次に夏火星と歌ひ侍るは夏といふ文字は夏と訓ずる文字なり。火といふ文字はひと訓ずる文字なり。かるがゆへに空には南方に住み、四季の中には夏三月を領す。五行の中には火を掌る物なりと、答へ侍るなり。終りの句に豊聡に問へと申すは、日本国には十八の異名あり。その中に豊葦原の国と申侍あり。その所は阿見が名字をも豊聡の皇子と申し侍る。さてこそ豊聡に問へとは歌ひ侍るなり。」

- | | | | |
|---|---------|--|--|
| 1 | 異「五きやう」 | | |
| | 天「五しやう」 | | |
| | 国「五行」 | | |
| 2 | 異「五きやう」 | | |
| | 天「五しやう」 | | |
| | 異「五きやう」 | | |
| 3 | 異「五きやう」 | | |
| | 天「五しやう」 | | |
| | 異「五きやう」 | | |
| 4 | 異「五きやう」 | | |

天「五しやう」

国、異文。

5 異「五きやう」

天「五せう」

国、異文。

6 異「五きやう」

天「五しやう」

国、異文。

7 異「五きやうの中には天下

をおさめ」

天「此こしやうてんかを納

て」

国「此星たかひに天下をお

さめ」

8 異「時に猶いかやうにはそ

うし給ふや」

天「時になをもつてそうし

給ふ物なり」

国、該当ナシ。

9 異「そらみなみのかたに」

天「うらみなみの方に」

国、該当ナシ。

太子十歳

春二月下旬の頃、一天の乱、朝家の御大事出で来る。去年六月の頃熒或星の告げによつて、太子御奏聞の御言葉、一言として違ひ侍らず、東夷攻め来たつて我朝の王位を奪はんとして、合戦をなし侍る也。

抑もかの東夷が本国と申は、我朝より東北鬼門の方に相当り、漫々たる大海の中に一千三十余の島国あり、これを蝦夷が千島と名付け侍る。かの千島の荒夷ども四人の大將軍を先として数千万億の眷族どもを召し具して、我朝の王位を奪ひ奉らんとす。聖徳太子生年十歳の春の頃、日本国に攻め来たる。時に我朝の王城は、大和の国磯城の郡三輪の里古蒙

の村初瀬川の辺、磯城嶋金刺の宮これなり。かの蝦夷が千島の大勢、日本に押し渡りて東山道、東海道兩道より王城へ攻めのぼりけり。その勢幾千億といふ数を知らず。先陣は既に大和の国三輪の山北、城戸が峰に陣を取り侍りければ、後陣の大勢は奥州石開、石踏、秋田の城を未だ出でやらずといへり。まことに天下の乱、日本の勝事なり。上一天の君より、下万民に至るまで憂へ嘆き、たゞ此事に極まれり。上下仰天、東西を弁へず。夷大勢はいよ／＼夜を日に継いで、乱入し侍りければ、帝大きに愀慮を驚かし、多くの臣下を召し御尋ねあり。「抑上代にも東夷日本に発向し、かくの如く国に悩みをなす先規ありや。」と勅し給へば、各々大臣勅答申し給ふ。「凡そ日本国は粟散辺土の小国なりといへども、東夷西戎やゝもすれば、西より新羅、百濟の夷ども攻め來たる事、度々に及べり。又千島の荒夷ども攻め來たる事、上古上代にもその例侍るなり。人王十二代景行天皇の御時、東夷日本に発向仕る、昔もその例なきにあらず。それは上古上代の事にて侍る、伝えてのみぞ承る。これはまのあたり王城へ乱入す。皇居既に危うき事に及び侍り。諸国の軍兵を召さる時分も待たず、夷の大將軍たちまちに内裏に発向すべき由風聞すいかゞ。」と嘆き申し給ひければ、時の帝敏達天皇、かの夷が兵難を恐れ給ひて鳳闕を辞して、たちまちに他所へ忍びの行幸をなし給ふ。天照太神の御代、人王の重宝と伝ふところの神璽、宝剣、内侍所等の三種の神器、御隨身ありて、鳳車に召されて速やかに皇居を立ち出まし／＼て、大和の国稻淵山の奥の谷に行幸ならせ給へる御輿の前後には、卿相

雲客、徒裸足にて御供仕り給へり。采女の官女等はまた各裳袴の側を取り、愁嘆して申されけるやうは、「抑天照太神は、我朝の百王一百代安無為に守らんといふ御誓願侍るに、当帝までは僅かに三十一代なり。未だ六十九代をだにも守り給はず。御裳濯川の御流、此の御代に絶え果て給ふ事よ。」と、泣き悲しみ合ひ給へり。忝くも天子は王宮を既に出させ給ひ、山林に迷ひ給ひき。御有様夢とも覺えず。現とも思ひ分きたる方もなし。あさましかりける御事なり。

遂に稻淵山の谷に鳳車の御輿を昇き据へ奉り、天皇太子を招じ奉りて詔し給はく、「さても去年の熒惑星の告げによつて奏し給ひしに違はず、今此の大難起これり。いかにとしてか、かの東夷が難を鎮め給はんや。」太子勅答申し給ふやう、「誠に一天の大事、四海の嘆き此事に極まり侍る。たゞし、群臣の詮議どもを承るに罪業の根源、殺生の基と覺え侍る。かの夷どもの形、鬼神に同じ。力用自在なり。あるひは放つ矢の先に毒を塗りければ、かの毒の矢に当る者、千万人か中に一人も助かり難きもの也。あるひは霧を降らし城を隠し、様々戦の秘術侍りければ、日本の軍兵ども百万騎をもつて合戦し給ふとも、さらに適ふべからず。もしなを強いて戦をなさしめば、両方ともに殺生の根源、罪業の基たるべく候ふ。我進んで自ら戦場に赴かんとすれば、幼少の身にしてその力用適ひ難し。退ひて黙せんとすれば、また朝家の御大事、此の一事にあり。誠に進退これ極まりけり。世は今かうとぞ覺え侍る。」とてさめ／＼と打ち泣き給ひければ、君も臣も再び王宮に還御なく、遂に山野に隠れ給ふ

べきにやと、御愁嘆深かりける御事なり。誠に東西かき暮れて心細く侍りけるに、太子のたゞ一言をもつて君を助け奉り、乱世再びもとに帰し給へり。その奏聞にいはく、「抑一天の乱世は今ばかりとぞ覚え侍る。

しかれば阿児御許しを蒙ぶり、夷の城に赴き、謀りごとをもつて宗との大將軍らを攻め出だし、所存を相尋ね、怒る心を和らげ世間の安否を伺ふべし。」太子たゞ一人白き御馬に召し、夷が城へ打ち向かひ給ひける。わざと御供には人召し具せられず。たゞ蘇我の大臣ばかり御供仕り侍りけり。山は太子の御氏神、大和の国三輪の大明神は和光利生の靈山なり。太子三輪の鳥居の御前にして、赤衣の御袖を掻き合わせ、懇ろに東夷が難を御祈請し給ふ。たちまちに御馬に召し、城に赴き給ひければ、城内城外の夷ども、太子を目に懸け奉り面々に申し合ひけるは、「さて／＼たゞ今見え来たる人は異相あり。此国に聖人出来し給へりと聞く、未だ十歳ばかりにして幼稚不肖なり。」と思ひ卑しめ奉る。

時に太子かの夷どもを降伏せんために初めて神力を現じ給へり。召さるゝ所の御馬に金鞭をしようと当て給ひければ、御馬たちまちに虚空に登り峨々たる巖山を御馬の四のひづめに懸け、大磐石を微塵に蹴砕き給ひて、太子御鎧の鼻にて、同じく岩山を蹴砕き給ひければ、城内城外の夷ども神国なるにより、たちまち神明の現じ来たり給ふとて、大きに恐れおのゝく。副將軍の荒夷ども磐石を抱き、遙かの高き峰より太子に投げ掛け奉り侍りければ、太子金の御鞭にてはたと合はせまし／＼て、高さ一町ばかりに七度まで投げ上げまし／＼て、その後西に遠く投げさせ給

ひければ、磐石雷電の如く虚空を響かし、三つに割れて二つは奥州、三川に至る。岩根といふ里あり。かの石の背、六七間の屋の如し。一つは播磨の国逸濟郡の海の渚に投げ付けまし／＼ければ、投げ石の浦と申す。さてこそ国の名所にて侍るなり。

次に副將軍の荒夷、毒の矢を放し射奉りければ、太子天に向ひてのたまはく、「抑天には無形に、正理正見をもつて体とす。今此の凶從暴惡の輩朝敵となりて、君王の敎慮を悩まし奉り万民を煩はす。かの一の矢を取りて、凶從を降伏し給へ。」と御鞭にて虚空に投げ上げ給ひければ、再び大地に落ちずうち失せけり。次に二の矢をまた御鞭に懸け、西に向かつて投げ給ひければ、遙かの西の紀伊の国日前の宮の鳥居に投げ給ひける。夷ども己が頼む所の武芸の道極まり、術尽きの侍りければ、俄かに霧を降らし城を隠しけるを、太子霧を晴らし給ひければ、城内城外の夷ども進退極まり、大きに仰天し侍りける時、太子我朝弓矢の力用を思ひ知らせんと思ひ召して、方便定の御弓、神通の鎬矢を取つてよつびき放し給ふ。これ三目の角の鎬なり。雷電の如く声を出し、夷が城を七返まで周り、天へ鳴りて登り、地に鳴つて下り、上下とんでんして、一城の内の夷ども迷惑せしめ、弓矢の本末を弁へず。しかるにかの四人の大將らの頭に付きて回りければ、堪忍すべきやうも侍らずとて、四人の大將軍城内を罷り出て、太子の御前に跪いて合掌し、しかるべくは命ばかりを助け給へと降参し奉る。

千島の荒夷ども形鬼神に同じ。髪赤く色黒し。しかれども日本の人の

廻船のために渡すところの色々な綾錦とうの衣裳どもを持つて、獺皮¹³、海豹、とこの皮を腰に巻き、己が命とゞもに惜しむところの鷲の名羽、切斑、中黒、棲黒、天面、遠露¹⁴、村雲など申す名羽どもを引集めて、首に懸けて侍りける宝を、太子の御前に備へ置き、「しかるべくは命と等しき宝を奉る。命ばかりを助けさせ給へ。」と嘆き申しけるなり。太子四人の夷の大將軍に告げてのたまはく、「抑汝らが大將軍等の交名ならびに副將軍等の名字、総じて召し具するところの勢の数、確かに名乗り申せ。」とのたまひければ、夷ども各異口同音に名乗り申さんとす。時に太子のたまはく、「汝らしばらく鎮まるべし。誠に汝らが交名、勢の員数悉く先立ちて丸は存じ思し召す物なり。汝らが大將軍の交名、先づ一つには綾槽、二には魅師、三には飛雲、四には走雲といへり。副將軍は夜叉神童、菊珍童といへり。その他召し具するところ千島の無類の夷の数、三億六万八千七百卅よ人なり。」とのたまひければ、時に夷どもも同音に声を挙げて感じ奉る。君の御意さらに違い給はず。日本の神なり。」と深く信仰奉るなり。¹⁶

次に太子夷どもが所存を尋ね給へり。「抑己らが今度我朝に渡るところの所存、何事ぞや。凡そ上代を聞こし召せば、我朝の人王十二代景行天皇の御時、汝らが先祖の夷ども、今の如く多くの眷族を引率し日本を從へんとせし時も、諸軍兵に勅してあるひは頭を刎ね、あるひは筋を断ち、一人も本国に帰らず誅せらる。今昔の旧例をもつて一人も助けくべからず誅すべきよし、君臣一同に詮議す。既に相定まりぬ。今は東西南北より

軍兵雲霞の如く馳せ來たるらん。汝らが命助からん事一人もあるべからず。しかるに阿児は殺生を深く戒むる間、かなはぬまでも汝らを助けんがために、密かに発向せり。とく／＼己らが所存を申すべし。」と責め給ひければ、四人の大將軍一同に答へ申していはく、「誠に君の仰せの如く、昔臣らが先祖の夷、千島の荒夷どもを相催はし、此国に罷り渡りて侍りけるを、一人も生きて本国に歸し給はずして失はる。かるがゆへに一に先祖の会稽の恥を清めんがため也。二つには又先祖か所存の如く、日本国を悉く横領までこそ叶ひがたく侍るとも、王城より東、日本を半国賜りて、臣らが進退せん。」と申奉る。太子重ねてのたまはく、「抑汝らが所存、兩条とうに確かに聞し召す。中にも日本国を從へて國王とならんといふこそ所存の外に思し召せ。それ夷らが形鬼神に同じ、身もまた鬼神の力用あり。その勢雲霞の如し。各々同心合力して前にはなにものか対揚に及ぶべきや。誠に我朝は粟散辺土の小国也といへども、神明の造り出し給へる国なれば神国と名付け、上不の諸人はまた神明の生育し給へり。かるがゆへに神の氏子としてその力用、他国の夷に勝れたり。しかればすなはち我生まれて僅か十歳なり。自ら一人の力用にだにも数千万の大勢適ひ難き夷ども、いかでか日本国の多くの神明の氏子を從へて、この国の主となるべきや。努々思ひよるべからざるもの也。」とのたまひければ、諸々の夷ども口を閉じ、物をも申さず。夷ども深く信仰の思ひをなし、やゝ久しうして申しあぐるやう、「誠に愚かなるかな、朕らもとより此いはれ弁へ知らず。先代にも後代にもこの国を從へんと

思ひかけ侍る事、誠にもつて愚か也。しかるべくは命ばかりを助け給へ。」と降を乞ひ奉り侍れば、太子答へてのたまはく、「抑、我今汝らが命を助け、本国に帰さん。己らが子孫、自今以後日本のため恨みをなすべからずと、三輪大明神を懸け奉るべしと確かに深き誓ひを立つべし。」と責め伏せ給ひければ夷ども三輪川にて手を洗ひ口を濯ぎ、かの三輪大明神に向ひ、深く誓ひを立て、いはく、「抑朕らが自今以後、子孫／＼に至り、清明の心をもつて、君を仕へ奉るべし。此誓ひを背かば天地開きまし／＼、世に現れ給ふ三輪の大明神、総じて百王宗廟の御罰を被り子々孫々悉く皆絶え滅びん。」と誓ひ侍るに、大に喜びの余りに日本の重宝たる色々の綾錦等祿物に与へ賜ひければ、夷どもいよく／＼太子の御芳恩を思ひ知り奉り、立ち帰り礼をなし、後々末代子々孫々に至るまでも、この国に向ひ恨みを結び奉らじと誓ひて、本国に帰る。

宇陀の郡に今道あり。夷ども逃げ失せたり。のちに既に七百余歳の今に至りて千島の夷、日本に発向する事なし。誠に上宮太子の興隆佛法、利益衆生は先づ大政道をもてす。御在世に忝なくも東征の夷ども従へて、末世の今に至りて、上一天の王位を安穩に保たしめ、四海の波を心安くして、その後堂塔を建て、仏像経巻を崇め、思し召すやうに仏法を御興行ありけり。有難き御事共也。観音大聖救世の御方便、有難かりける御振舞ひどもなり。

欽明天皇の御宇、僧徳丁巳春の頃、²⁸靈鷲山金剛嶺の良の隅破裂し、白雲に乗じて、大和の国大峰に落山しぬ。²⁹さんかうせんこれ也。

善光寺の如來の御事、天竺月蓋長者、百済国にては聖明王、日本には善光三世の契約の御事。天竺の伽藍の初めは須達長者建立せし一百余院、祇園精舎これなり。震旦国には漢の明帝の代に興生寺、白馬寺これなり。日本国には仏法最初の天王寺これなり。天竺には那蘭陀寺、震旦には白馬寺、日本には六波羅寺この三つの寺は北向きに門あり。信濃の国に妹子勅使として神祭して、すなはち夜に入て俱具を儲け、庭火を整へたき、太子七宝の幣帛を捧げ啓上し給ふあいだ、承るもの皆悲涙をながし大小の神祇宮中に影向し給ふ。それより葦垣の宮を神やの村と名付け、四月十六日より安居を初めて行ふ。七月十六日に至りて九旬なり。夏堂に閑居す。これ静かに道を修せんとなり。惠慈、惠惣とり申て、元興寺より妃行す。關伽井の額の札にいはく、和州高市の郡に靈池あり。安居院の井と号す。甘水龍宮より流れて京辺に留まり、これを飲むに命を増す。知るべし／＼妙法源起覺如蜜水より、件の札は一尺一寸の白金なり。文字は黄金をもつて記す。皆古文なり。太子四十の御年九月、太子奏していはく、国中に用水堤を築かしむ。³¹これをは以前に池ありといへども、まさしく田のために池の堤を築く事なし。これより初めて流れ過ぐる水を池に築き込め、空しく落ち行く川を堰き上げて田の用水とせり。されば大和より築き始めて、山城の国に大なる溝、栗隅に掘る。これ嵯峨の南なる大井の事なり。此川を大井川と名付くなり。日本の井溝の初めなり。白露に昔の衣はしはるとも月の光は濡れんものかは妄念煩悩の心、提婆邪見によつて如來の正覚現り。守屋が悪行によつて

太子の慈悲は善惡に對敵す。迷ひ悟りに向ふ理なり。天台の心因果不二といへる。ともにまたしかなり。卑因單星をもつてならざるなり。佛神本進同一軌なるを、かれを秘し、これを知らず。守屋と太子の意樂名別なり。

- 1 異「あくせんおく」
天「いく千万」
国「いく千億」
聖「何千万億」
万「何千万」
- 2 異・国「いしひらき石ふみ」
天「石ひらき石ふみ」
聖「壺ノ石踏」
万「石開之石踏」
- 3 異「あんふゐ」
天「あんふひ」
国「あんをんふゐ」
聖「安穩無為」
万「安穩無為」
- 4 異「今」
国「二つはあふしうみつ川

にいたり。いわねといふ里。あり」
天「二つはあふしう水川にいたる岩根と云里有」
聖、該当ナシ。
万「一奥州三般砂摩墮付一三河国墮付今岩根云処是也」

- 5 異「あんひを」
天「あんふを」
国「安否を」
聖「案否」
万「案否」
- 6 異「そもく」
天「扱々」
国・万「抑」
聖「抑々」
- 7 異「二つは奥州みつ川にいたるいわねといふさとに有り」
国「二つはあふしうみつ川

みじんづうのかふら矢をとつて」
国「方便定の御弓に神通のかふら矢をはけて」
聖「方便定ノ御弓ニ智慧神通ノカフラ矢取テ」
異「つつけのかふらや」
天「つのゝかふら」
国「つのゝかふら」
聖「角カフラ」
万「鎗矢」

- 8 異「めかのこほりのうみ」
天「逸済郡の海の」
国「逸済郡のうみの」
聖「逸済浦ノ」
万、該当ナシ。
- 9 異「むきやう」
天「無きやうに」
国「無形」
聖「無三形」
- 10 異「はうべんちやうの御ゆみしんづうのかふらやをとつて」
天「ほうへんちやうの御ゆ

みじんづうのかふら矢をとつて」
国「方便定の御弓に神通のかふら矢をはけて」
聖「方便定ノ御弓ニ智慧神通ノカフラ矢取テ」
異「つつけのかふらや」
天「つのゝかふら」
国「つのゝかふら」
聖「角カフラ」
万「鎗矢」

天「意案名別なり」

太子十一歳

春二月の頃、大和の国高市の郡、難波劍の池の北なる小林の園のうちにおゐて、三十六人の童子を引率して、さまざまの御勝負あり。始めには武芸の道を教へ給へり。これを弓石の遊びと名付く。諸々の童子に告げていはく、「抑日本は神国にして人の心も賢く、謀りごと余の国の人に過ぎたり。男子の身もつとめ諸道におゐて稽古あるべきもの也。なかなづく文武の二つ、これ定恵の二法也。文道の教を知る者は君のため忠を致し、父母のため孝あり、天下の政道を弁へ万民を撫育する事、総じて悉く仁、義、礼、智、信の五常の道を備へ、今日は吉日なり。先づ武芸の道を稽古あるべし。薬師十二神将、千手の廿八部衆は皆往古の如来、久成の薩埵なり。各々随類応同の日、忝なくも柔和忍辱の体を改め、弓矢を持物とし、刀杖を執持して、悪魔を降伏し給へり。いはんや凡夫におゐてをや。この道欠けてはいかでか怨敵を平らげ、国の凶徒を鎮めべきや。」太子身づから先づ弓を引き矢を放ち給ふ。昔震旦に聞こえし養由が体を継ぎ、更盈が弓の勢もかくやと見えたり。千度放し百度放ち給ふ矢ども思召す矢壺さらに外るゝ事侍らず。

次に石の御遊びと申すは碁、双六盤の上の御遊びども也。抑も始めて此道を巧み出し侍りける人は、震旦の天子堯王ならびに子建と申しける人

の初めて創り出し給へり。かやうの石の遊びにおゐても太子悉く通達し給へり。しかのみならず砂を集めて文字を書き付け、多くの砂どもを打ち乱して、片時の間に文字の次第を選び合わせてこれを順次次第に悉く読みも連ね給へり。かるがゆへにかの御弓の遊びこの石の御遊びどもを石弓の遊びと名付け侍りき。この他に又詩歌、管弦とうの御遊びは中々申すに及ばず。一切の諸道におゐて芸能を極め給へり。

釈尊因位に悉達太子の古へもつてかくの如し。人間の一切の芸能、ことには文武の両芸を極め、七歳の御時は斛飯王の太子、提婆達多に對して妃争いの様々の勝負をなし給ふ時、御弓の勝負に定まり侍りける時は、祖父獅子頰王の御弓、五百人して張りけるを召し出され、七歳の御幼稚の御身一人してよくこれを張り、弦打ちし給ひける御声、上は梵天まで遠く聞こえ、引き放し給ふ御矢は過たず厚さ三尺、七鼓を射通しぬ。猶大地の底、十六万八千由旬の金輪際まで射通し給ひ侍りき。

今我朝の聖徳太子もまたもつてかくの如し。諸々の童子に伴ひ給ひて、種々の勝負を決し給ひ、或ひは相撲を取り勝つ事を得、或ひは竹馬に鞭を打ち、遠く陸地を走り給へり。しこうして後には万里の虚空に登つて雲を分け、霞を踏み、空中に座臥し飛行して自在の徳を施し給ひけり。時に童子たち、大地におほへてだに等しく振舞ひ侍らず。太子万里の虚空に登り給ひければ、諸人目を驚かして仰天し侍りき。凡そ大聖大権の御振舞ひなれば、初めて驚くべきにあらずといへども、随類応同の前には不思議なりける御事どもなり。

かやうに武芸の御遊び終つて、その後又、文芸を教へ給へり。時に太子の御兄弟の王子たち、並びに人々の公達、総じて卅六人の童子らに御約束あり。各々一切の難字を整へざる言葉など、共に書き集めて、面々に一巻の巻物どもを捧げ、同時に読み上げて、太子に問ひ奉る。時に三十六人の童子の中に御据へ奉り、八方に立ち別れて、同じ時に声を上げて、異口同音に読み上げ侍りけるを、太子いづれも悉く聞こし召し分け給ひ侍りき。総じて天竺、震旦、日域三国相承して、読み伝ふるかの文字の訓真を一々、銘々にいづれも流水の弁舌滞りなく答へたま侍りき。かくの如く連日の御勝負に太子等しき人更にまします。かの三十六人の童子の交名をば末代のために大和の国法興寺の講堂の壁板に太子御自筆に書き付け給へり。

鷹子親王 筒嶋王子 米目王子 小林王子 大原王子 小嶋王子
雲見王子 難波王子 早来王子 石見王子

これは皆、太子御兄弟並びに御一門の王子たちなり。つぎには又、卿相、雲客の君達その御交名とうを書き連ね給へり。

嶋角童子 小嶋童子 早走童子 鬼勝童子 岩手童子 月願童子
桧隈童子 小松童子 山路童子 板住童子 走出童子 椿木童子
鳥羽童子 弓取童子 早目童子 足輕童子 縄手童子 片山童子
遠山童子 高松童子 鬼取童子 葛来童子 十市童子 田鳥童子¹²
犬飼童子 馬耳童子 以上三十六人也

抑も此三十六人の童子たちは、皆これ大聖権者久位通達の大菩薩等也。

暫く主伴の利生をなして、太子の感徳を表し給へり。こゝをもつて比叡山の曩祖慈覚大師聖徳太子の十六歳の御影を自ら絵図にし奉り、御供養を述べ給ひける時の御嘆徳の文に曰はく、「忝なくも上宮太子生年十一歳にして、諸童子石弓の遊び、静かにおもんみればこれ三十七尊の随類応同のりうしやうをめぐらし給へり。尊ときかな厩戸の皇子、御年十六歳にして守屋のけしんを誅せしめ給ふ事、情らおもんみれば、又、十六菩薩の因行証入の功徳を表し給へり。」と云々。

蓮華三昧経¹¹文云、

帰命本覚心法身 常住妙法心蓮台 本来具足三身徳

三十七尊住心城 普門塵数諸三昧 遠離因果法然具

无边徳海本円満 還我頂礼心諸佛

この経文によりて慈覚大師、聖徳太子を嘆徳し奉り給ひけるなり。ただし此の太子十一歳の御時の石弓の御遊び、三十六人の童子は一会の所化どもなり。能化聖徳太子を加へ奉り、卅七尊に満じ給へり。

かくの如く連日の御遊びどもを父用明天皇、木陰に立ち忍びて御覧ありて、宮に還御なりて、妃に告げての給はく、「抑この厩戸の皇子、年々歳々に、時々夜々の御振舞ひと耳目を驚かし奇特ども誠に様々なりといへども、此程連日の遊びども心も言葉も及ばれず。一箇の内に三十六人の童子を八方に立て、唱ふる言葉を同時に悉く聞き分け給へば、今日よりこの太子をば、八耳の皇子と名付け奉るべし。」太子十一歳の御時より又、父用明天皇の勅定にて八耳の皇子と名付け奉り給ひけるなり。

遠く天竺をとぶらふに釈尊の在世、十大御弟子目蓮尊者は天恨自在の徳を備へ給ひけるとも、今我朝の聖徳太子は劣らざりけり。又震旦をとぶらへば漢家の天子初めて第三代、黄帝と申ける国王の御世に十人の臣下ありき。釈尊十大の御弟子の如し。各々皆一徳を身に具足し侍りき。徳黄帝の十徳を備へ十人の臣下の中に離朱、伶倫とて二人の臣下侍りき。離朱と申ける臣下は天眼自在の阿那律尊者の如くに眼明らかなる徳を備へ、居ながら千里の外に蚊の片腿の落ちたるを明らかにこれを見る。伶倫と申しける臣下はまた天耳自在にして目蓮尊者の如し。耳の賢き徳を具して、これも又居ながら千里の外に蚊の泣く声を明らかにこれ聞き侍りき。

今我朝の聖徳太子も又々かくの如し。昔の離朱が明らかなる眼を備へずといへども宮中に居給ひながら、天竺、震旦十方の事を皆照覧し、古への伶倫が耳にあらねども榻の上に座し²¹、かくて本朝日域の三十六人の童子言葉²²を悉く弁へ給へり。誠に聖徳太子の御本地は救世観音、三世了達の御知恵朗らかなりといへども、随類応同の前には不思議なりける御事どもなり。

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1 異「なんしの身もつとめ」 | 2 異・天「そなへ」 |
| 天「なんしみもつとめ」 | 国「そなへたり」 |
| 国「男子 ^{ナニシ} の身はもつとも」 | 正「ソナヘリ」 |
| 正「男子ノ身モツトモ」 | 万「備 ^ム 」 |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|--------|--------|------------|-----------------|----------|--------------|-------------|-------------------------|-----------------------|----------------------|-----------------|-----------|--------------------------------------|--------------|---|---------------------------|--------------------------|--------------|
| 3 異「しづむ」 | 天「しづめ」 | 国「しつむ」 | 正「シツム」 | 4 異「ぎやうちうざぐわにし」 | 天「さくわし」 | 国「ぎやうちうざぐはし」 | 正「行住座臥シ」 | 5 異「をゐて」 | 天「覚 ^{おぼ} へて」 | 国「おひて」 | 正、該当ナシ。 | 6 異、欠文。 | 天「一さいのなん字 ^じ を調さることはなと／＼とも | に | 国「一さいのなん字をととのへ逆記 ^{サカコト} なぞ／＼ともを」 | 正「一切ノ難字ヲソロユテ | | |
| 7 異・国「すへ」 | 天「おすえ」 | 正「スヘ」 | 8 異「給ひ侍りき」 | 天「給はんへりき」 | 国「給ひ侍りき」 | 正「給けり」 | 9 異・天「れん日の」 | 国「連日 ^{レンジツ} の」 | 正「連日ノ」 | 案、底本の衍字「の」を一
字削除。 | 10 異・国「太子にひとしき」 | 天「太子ひとしき」 | 正「太子ニ」 | 11 異「かつ木とうじ」 | 天「葛木 ^{かつもき} 童子」 | 国「葛木童子 ^{カツモキコ} 」 | 正「葛木 ^{カツモキ} ——」 | 12 異「田はくとうじ」 |

太子十二歳

秋の頃高麗国の沙門、日羅上人将来せり。それ我朝の人王三十一代の帝敏達天皇は臣を求めんがために百済国に御使ひを立てられ給ふ。その交名をば吉備海部の羽島の連と申しける大臣を勅使とし給へり。即ち井北達と申す賢人を尋ねえて、相伴ひて帰朝仕り侍りける時、かの日羅上人、折り節百済国に渡りて、日本に罷り渡らんとする時に、井北達と同伴して我朝に渡りき。九月下旬の頃に、津の国難波の浦に着き侍りければ、我朝の王城よりは群臣その数を知らず行き向かひ問答せられる。

しかうして高麗、百済兩國の僧俗の賢人來朝して、理政の政を清談する由を、太子聞し召して窺ひ御覽ぜられる時、御姿をやつし、御かたちを墨に塗り、麻の衣、縄の帶を結び下しまし／＼て、同じ程の十一、二歳の下種童部十余人召し具して、太子、難波の浦に行啓して、下種童部の中に立ち交はりまし／＼て肩を並べ袂を連ね、遊び戯れて、何となきやうにて、大国の旅人どもを窺ひ御覽ぜられるに、日羅上人、かの十余人の童子の中に太子を怪しみ奉りて、奴に告げて曰はく、「こゝなる童部、身に通力あり。心に神力あり。しかゝの衣裳の色の紋を着たる童子なり。相語らひて來たるべし。」といへり。太子御耳賢こき御事なれば、この由を聞し召し、やうやく逃げ去らせ給ひける。時に日羅上人急ぎ船より飛び出て追い奉る。太子御後の御衣を日羅上人の手に掛けつ外しつ、相近く逃げ去らせ給ひければ、日羅上人は今只捕らへ奉らんと思ひ侍りけれども、遂に叶はず、手を空しくてまかり侍りぬ。

- | | |
|----------------------|------------------|
| 天「田鳥童子」 | 正「十第子の基隨二」 |
| 国「田辺童子」
田鳥イ(タトリイ) | 異「天けんじさい」 |
| 正「田辺——」 | 天「天恨じさひ」 |
| 万「田辺童子」 | 国「天眼自在」 |
| 異・国「りしやう」 | 正「天耳自在」 |
| 天「りうしやう」 | 異・国「とくくわうてい」 |
| 正「利生」 | 天「徳黃帝」 |
| 異・国「げきしんを」 | 国「徳黃帝」 |
| 天「げきしんを」 | 正「黃帝」 |
| 正「逆臣ヲ」 | 異「しちのうへにまし／＼て」 |
| 異「あそひどもを」 | 天「しちの上にさしまし／＼くて」 |
| 天「あそひどもを」 | 国「楊の上に座しまし／＼て」 |
| 国「あそびどもを」 | 正「楊上ニ座シ給ヒテ」 |
| 正「遊トモヲ」 | 異「とうじの」 |
| 異・国「御ふるまひ」 | 天「とうし」 |
| 天「ふるまひど」 | 国「童子の」 |
| 正「フルマヒ」 | 正、異文。 |
| 異「十大御弟子そのずい一に」 | |
| 天「十代御てし」 | |
| 国「十大弟子のその随一」 | |

太子は父の天皇に申させ給ふやう、「抑大國の旅客どもをよく窺ひ見侍りければ、一人は阿児か先生⁴の弟子に日羅上人と申す僧にて侍り。今は心安く御許しを被りて、先生⁵の事どもを互いに清談すべく侍れ。」とて常に召さるゝところの赤衣を着給ひて、難波の浦に行啓なりければ、日羅上人、庭上に膝まづき、頭を地に着け、涙を流し心中に思ひ連ね侍りけるは、これは正しく我本地⁷、生生まれ替はり給へり。哀れなるかな、昔の師匠は遙か老人の体にておはしますべきに、二生に形を改め給ひぬれば、僅か、十一、二歳の童子となり給へり。悲しきかなや、我身は正しくかの御弟子なりといへども、未だ先身を改めず、八旬の老体となりぬる事かな。抑も太子の御本地を尋ぬれば、遠くは極楽浄土の補所大士、近くは補陀落世界の教主也。しかるに今かくの如く、随類応同して大悲利生を施し侍りける也。その礼文に曰はく、「敬礼救世観世音 伝灯東方粟散王。」と押し返し、三度礼し奉りけるなり。文の心は本地は救世観世音の垂迹、東方日本粟散國の王位に生まれ給へりといふを、唱へ侍りけるなり。時に太子とりあえず次の利生句の文を付けて唱へ給へり。「從於西方來誕生 開演妙法度衆生。」太子これも三度、押し返し、唱へ給へり。文の心は御本地は救世観世音、無縁の慈悲に催され、西方浄土より、東方日本國に來たつて、仏法を広め、衆生を利益すといふ御心を答へ給ひ侍りける。かくの如く太子の御本地観世音と礼し給ひ奉る時、たちまちに感應ありて、眉間より光明を放し、日羅を照らさせ給ふ。日羅上人もまた、身より光明を放ち、互ひに照らし侍りき。その時、太

子の御供の人々、並びに日羅上人の召し具するところの僕ども、各々信敬の思ひをなし、随喜の掌を合はせり。

その時、太子日羅を近く召して宣はく、「抑阿児と汝と多生の師弟の契りは深重なり。汝は未だ生を替えず、昔の体なり。かるがゆへに弟子なりといへどもその体、老々として頭に三冬の雪を戴き、眉には八字の霜を垂る。残る命は幾許ならず。見るにつけても哀れなり。我は汝が昔の師匠なれども、二生に替はりぬれば、古躰を改め、幼稚、幼弱の童子なり。我生を隔つといへども昔の事は少し忘れず。誠に別れやすくして、逢ひがたきは生死無常のならひなり。」とて太子も御涙を流し給ひければ、日羅もともに涙を流す。太子の御供の人々も同じく哀れを催し侍りき。時に日羅悲嘆して曰はく、「悲しきかな。只今太子御驚覺によりて先生¹⁴の事を悟る。昔君に別れ奉りて後は、乳飲み子の女¹⁵を失へる心地して、一日片時も本國に心停まり侍らず。東海日本國に生まるべしと示し給ひしによつて、君衡山御入滅の後、六年に相当たりて、一葉の船に乗り、万里の波に漂ひ、御行方を尋ね奉るほどに心に任せざる海上なれば、悪風に放たれ、昔僅かに名のみ聞きし蓬萊山に至りぬ。順風を得ずしてかの島に年月を重ね、船中、波の上に心身を苦しめ、鬚髪も長じぬれば、ひとへに俗人に異ならず。高麗國より思ひ立ち心の引くに任せ、東海中の島に吹き付けられ、ある時は又百濟國に至り、今年七か年の間嘆きて年を送り、悲しみて日を重ぬ。しかるに蓬萊山に渡りて不死の薬をや服しけん、生を替えずして命の中に只今二生の師匠を見奉るこそ嬉しけ

れ。』とてさめぐと打ち泣き侍りければ、太子もともに涙を流し給ひけり。

- 1 異「御かたちにすみをぬり」
天「御かたちをすみをぬり」
国「御かほにすみをぬり」
聖「御貌塗^{カラニリスミツ}黒」
正「御カホニスミヲヌリ」
- 2 異「御らんせられける時」
天「御覽せられけるに」
国「御覽せられけり時に」
聖「被^レ御覽^{コソシヤウ}ケル御躰^{ミタマ}是^レ也^ニ時^ニ」
正、異文。
- 3 異「まかり帰り侍りぬ」
天「まかり侍りぬ」
国「まかりかへり侍りぬ」
聖「罷^{マカリ}返り侍リヌ」
- 4 正「飯^{イハ}侍^{サマ}ヌ」
異「ぜんしやう」
天「せんしやう」
国「せんじやう」
聖・正「先生」
- 5 異「ぜんじやう」
天・国「せんしやう」
聖「先生」
- 6 異「みゆきなりける」
天「きやうけひなりけるは」
国「御行なりける」
聖「成^{ナリ}御行^{ミヨウ}ケル御躰^{ミタマ}是^レ也^ニ」
正「御幸成給へり也」
万「御行成」
異「ほんし」
- 7 異「ほんし」
- 8 異「りやうくのもの」
天「りせうのものもん」
国「両句の文」
聖「両^{リョウ}句文」
正「両句ノ文」
異・天・国「むえん」
聖「無縁^{ミツ}」
正「無縁」
- 9 異「かく」
天「ほくとも」
国「客^{カク}とも」「僕^{ボク}」の上に重書。
- 10 異「く」
天「く」
国「く」
聖「上下ノ客^{カク}」
正「上下ノ旅客」
異「ちんちう」
天「しん中」
国「じんちう」
- 11 異「はう」
天「女」
国・聖・正「母」
- 12 異・国「むかしの事はわすれず」
天「むかしの事はわすれず」
国「むかしの事はわすれず」
聖「深重^{シンジュウ}」
正「染重」
- 13 異・国「太子の」
天「太子」
国「太子」
聖「太子」
正「昔ノ事ヲハスレス」
異・天・正「太子」
- 14 異「ぜんしやう」
天「せんしやう」
国「ぜんじやう」
聖・正「先生」
- 15 異「はう」
天「女」
国・聖・正「母」

太子十三歳

秋九月に、弥勒の石像一体、並びに二臂の如意輪観音一体、百済国の大王より日本の国王へ贈り奉り給へり。かの本尊を太子と蘇我の大臣と諸共に拝し奉り供養し給ひける。時に太子蘇我大臣を教化し、願主として、初めて大和の国高市の郡豊浦の庄内に大伽藍を建立し給ひき。凡そかの仏閣と申すは、金堂三間四面、講堂七間二面、五十六間僧坊、鐘樓一字、二階樓門一字、五重宝塔一基。右この大伽藍を、太子十三の御年、悉く造り終つて、寺号をば興嚴寺と、太子御自ら書き給ふ。今は所の名を豊浦とこれを申す間、世の人の御堂を豊浦寺と申し伝へ侍り。これ日本最初の仏閣也。太子かの寺の宝塔を御拝見ありて宜はく、「抑宝塔は必ず仏舍利の器物也。もつともかの塔婆に仏舍利を崇め奉るべし。それ仏法遠きに非ず。心中にして即ち近し。宜しく汝ら信心を専らにして、仏舍利を祈請すべし。」と教化し給へり。よつて蘇我の大臣信心を専らにして、三七日の間潔斎一食にして祈請せられければ、一粒の御舍利、金色の光明を放し、忽然として飯の上に飛び現れ給へり。こゝに大臣感応の空しからざる事を喜びて、一には舍利の真偽を弁へ、一は末代の衆生疑ひを除かんがため、鉄の質の上に置き奉り、鉄の鎚をもつて、これを打ち奉る。その金床と鎚とは悉く碎け破るといへども、御舍利は損ねず。ある時は御舍利鉄散の中につと入り、ある時は鎚の中に入り給ふといへども、仏舍利はさらに碎け給はず。いよ／＼光明を放し給へり。この時大臣、随喜の涙を流して瑠璃の壺に納め奉り給ひき。太子かの仏舎

利を拝し給ひて、感涙をおさへ、大臣に告げて曰はく、「我前生に衡山におゐて多生の間修行せしかども、仏法奇特を現す事希なり。汝は既に功德成就の人なり。自今以後汝と契りを結びて、善友知識として仏法を興すべし。これ誠に如来の真²たつなり。」とて、かの豊浦寺の五重の塔の心柱の下に納め給ひにき。

抑日本国は天神七代、地神五代、十二代数千万劫を経るといへども、仏法の名を聞かず。神武天皇の御宇より人王始まりて、既に二十九代宣化天皇の御治世に至りて一千余年、なを仏法の名を聞かず。しかるに人王三十一代敏達天皇御治世十三年に相当たりて生身の観音、聖徳太子と示現して、御年十三の御時我朝日本国の中には、大和の国高市の郡豊浦の里に、初めてかの堂塔を建て、日本無仏世界にこれより仏閣、三宝の数を整へまし／＼て、仏法繁盛の国となし給へり。我等今三宝に近付き、一善を蓄ふるも皆聖徳太子無辺の恩徳にあらずや。無量億劫にも聞きがたきものは、これ三宝の名字なり。それ三宝について品々ありといへども、殊に末代には住持三宝の利益勝れ給へり。三宝とは仏一切衆生のために三つの宝を説きて、これを与え給へり。

抑世間の財宝と申すは、火宅の福業なきもの今生に全く感得しがたきものなり。たま／＼寿福によつて財宝を蓄ふる人も、さらに心安からず。遠近に求め、東西に尋ねるに炎天に汗を流し、極寒に水を凌ぎ、山には山立、海には海賊とうの路次の煩ひに肝を消し、身を疲らかし、里には強盜等を恐れ、日夜朝暮に水火盜賊の難を憂へて心身を苦しめ、一生

は空しく尽くるといへども、希望はさらに尽きがたし。しかるに澄憲が曰はく、忽然として一人冥土に赴く時は、繫契⁷の輩前後に従はず。色々の衣を整へ寒温をとぶらふことなし。身体尪弱として一粒をも裹まず。心神恍惚として万事夢の如し。天に仰ぎ地に伏して涙を流せども助くべき人も見えず。地に伏して胸を叩けども来りて怜れむべき輩もなし。常に身に従ふものとは是れ前世の業、永く心に懸かる事は即ち後悔の悲しみなりといへり。凡そ世間の七珍万宝、一つとして全く冥土の資糧ならず。しかれば仏、人間の財宝を宝とし給はず。今世、後世を助くるは仏法僧の三宝を一切衆生に与へ給へり。その三宝とは仏の宝、法の宝、僧の宝この三つ即ちこれなり。

先づ初めに仏宝と申すは一切の絵像、木像等の仏菩薩の像これなり。それ一切の仏菩薩は格別の願不思議にして一称一礼の結縁をもつて現当二世の願望を助け給へり。拝し奉るに滅罪生善の徳あり。かるがゆへに一切衆生の第一の宝なり。その言葉に云はく、第一には三劫⁸不翻の罪障も消滅すと也。

第二の宝には一切の経論聖教等これなり。法華経には、若有聞法者無一不成仏と説かれ、又一称南無仏皆已成仏道とも述べ給へり。大般若経理趣品には、殺害三界不陀惡趣と説き、又大経には、設満大千火直火聞法各と演説し給へり。此ゆへに弘法大師の御釈には、一句の妙法は億劫にも聞きがたし。一仏の名字は優曇華の譬にあらずといへり。かるがゆへに三の宝の中には聞法功德をもつて第二の宝とし給へり。

第三の宝には一切の僧比丘尼等これなり。かくの如く三宝を太子初めて御建立の興嚴寺に整へ置かんと思し召されけるに、仏の宝には今の善光寺の如來と、太子八歳の時、新羅国より渡し奉る所の金銅のしかの三尊等、南瞻部提第一の靈像をか¹²の寺に崇めて三宝の中には初めの仏宝とし給へり。一切衆生の今世、後世を助く第一の宝即ちこれなり。第二の宝には太子六歳の御時、百済国より渡し奉るゝところの経論二百余卷、一切衆生の現当二世を助けたる¹⁴ありがたき法を第二の法宝とし給へり。第三の宝には百済国の住侶、善光寺の如來の御供として日本に渡り侍りし慧聡¹⁵、慧弁と申して、二人の高僧をか¹³の最初の御建立の興嚴寺に住せしめ給へり。

しかりといへども日本国に出家の男女未だなかりし時代なりしかば、尼衆一人もなかりき。一切諸経の中に比丘、比丘尼の両衆を連ねて僧宝とせり。しかるにこの御時は百済国の二人の僧衆は住し侍りけれども、未だ僧尼一人もなかりしかば、三宝未だ調ほらず。太子三人御乳母を教化して出家せしめ、我朝の衆生の仏道にはれ先達となし給ひ侍りき。三人の御乳母のその交名は月益姫、玉照姫、日益姫と申す。三人の乳母を御前に召して教化し給ふやう、「抑各々阿児が言葉において一言も背くべからず。しからば申すべし。」との給へり。三人の御乳母は人の上にも未だ聞かざる事にて侍れば、出世よと仰を被る事とも、夢にも知らずして、各々進んで「何事にて侍るとも、君の御誡をばいかでか一言も背き奉るべき。」と申されければ、太子教化し給ふやう、「それ多生曠劫

にも人身を受くること希なり。たとひ人身を受くといへども、仏法に逢ふ事最も難しとす。今たま／＼人身を受け、仏陀に結縁なく空しく三途の古郷に帰りなば、宝の山に入りて手を空しくするの戒め、後悔千萬なにの益かあらざらん。なかんづくに一切の女人は花の体、かんばせ妙なりといへども、五障の苦しみ、三従の憂へ深くして、仏力にあらずは十方浄土にさらに望み難し。たゞ生々世々に三惡道を住処として、地獄に沈みなば、出離いづれの世をか期すべき。哀れなるかな、鴛鴦の衾の下に比木の語らひをなせども、花の体を破れざる間の形なり。悲しきかな鸞鳳の鏡に影を並べ、芝蘭の契りを結べども、露の命の消えざるほどの情なり。盛んなる色止まらず、なをし走る馬の如し。人の命の無常なる事、さん水にも過ぎたり。今日は長らふといへども明くればまた保ちがたし。早く仏陀に帰依して卑しき女人、五障三従の体を改め、速やかに三十二相の菩薩の身を得給へと懇ろに教化し給ひければ、三人の御乳母たちまちに発心出家せり。まことに太子御教化の御言葉、胸に当たり、肝に染みて、ことはり至極し侍ければ、三人の妓女たち各々未だ盛りなる花の体、月のかほばせ妙なりといへども、早く出家の形となし給へり。たとひ今までは月益姫、日益姫、玉照姫と申されける人々、出家の後には法名を賜りて一人をは善心²³、一人をは禪蔵、一人をは惠善と名付け給ひき。かるがゆへに太子十三歳にしてこの御寺より三宝の教調へ給ひし、その随一なり。いま此善光寺の如来は難波の海より取り上げ奉り、彼の御寺に安置し給へり。誠に日本無仏世界三宝流布の功德なりける事、聖徳太

子の生年十三の御時よりの事どもなり。

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|---|---|---|---|---|---------------------------|---|---|---|---|---|---------------------------|
| 1 | 異「ぢざい一しきにして」
天「きつさひ一しきに
して」
国「じざい一じきにして」
聖「持濟一食」
正、欠文。
万「一食持齋」
異、欠文。
天「しんたつ」
国「しんこつ」
聖「眞骨」
正「眞骨」
万「全身」 | 2 | 異「むりやうおつこう」
天「無りやうをつかう」
国「無量億劫」
聖「無量億劫」
正・万「無量億劫」
異・天「くわたくの」 | 3 | 異「むりやうおつこう」
天「無りやうをつかう」
国「無量億劫」
聖「無量億劫」
正・万「無量億劫」
異・天「くわたくの」 | 4 | 異「はるるい」
天「繫契」
国「繫馮」 | 5 | 異「じゆふく」
天「しゆふく」
国「しゆくふく」
聖「宿福」
正「宿福」
万、該当ナシ。 | 6 | 異「がうせつ」
天「こうせつたうとう」
国「がうたうせつだう」
聖「強盜窃盜等」
正「殺盜強盜」
万、該当ナシ。 | 7 | 異「はるるい」
天「繫契」
国「繫馮」 |
|---|--|---|---|---|---|---|---------------------------|---|---|---|---|---|---------------------------|

- 8 聖「繫^{シヤク}憑^{ヒョウ}」
正「繫^{シヤク}憑^{ヒョウ}」
万、該当ナシ。
異「三こうふほんのざいし
やうせうめつす」
- 11 国「直火聞法名」
聖「直過聞仏名」
正・万、該当ナシ。
異・天「しやか」
国「釈迦^{シヤカ}」
聖・正「釈迦」
万、該当ナシ。
- 12 天「なんせんふたい」
国「南瞻浮提」
聖「南閼浮提」
正「南閼浮提」
万、該当ナシ。
- 13 異・天・国「たすく」
聖「助^{タル}」
正「助ケタマヘル」
万、該当ナシ。
- 14 異「たすくる」
国「たすかる」
天「たすけたる」
聖「助^{タル}」
- 15 正「タスクル」
万、該当ナシ。
異「あさうあへむ」
天「あそうえへん」
国「慧聡^{エソウ}惠便^{エビ}」
聖「慧聡^{エソウ}慧弁^{エビ}」
正「惠聡^{エソウ}兩弁^{リョウベン}」
万「慧聡^{エソウ}慧弁^{エビ}」
異「ちうじし」
天「住し」
国「住持^{ヂウヂ}し」
聖・正「住持シ」
万「住持」
- 16 異「はせをのたい」
天「花^{ハナ}の代^{ダイ}」
国「はせを」
聖・万、該当ナシ。
正「比翼」
- 17 異「ふつだうに」
天「仏道にはれ」
国「仏道にいる」
聖「入^{イル}ニ仏道^{ブツドウ}」
正「道ニ入ヌル」
万、該当ナシ。
- 18 異「しゆつけせよ」
天「しゆつせよ」
- 19 異「ひよく」
天「ひよく」
国「ひよく」
聖・万、該当ナシ。
- 20 異「はせをのたい」
天「花^{ハナ}の代^{ダイ}」
国「はせを」
聖・万、該当ナシ。
正「芭蕉^{バキョウ}ノ葉」
異「さむすいにもすぎた
り」
天「さんすひにもすぎた
り」
国「さんすいにも過たり」
聖・万、該当ナシ。
正「流ル、水ノコトシ」
- 9 異「ふた」
天「不陀」
国「不墮^{ブダ}」
聖・正「不隨」
万、該当ナシ。
- 10 異「ちぎくわもんほうみや
う」
天「直火聞法各」

22

異「ぎぢよたち」

天「き女たち」

国「ぎぢよたち」

聖・万、該当ナシ

23

正「貴女達」

異・天「せんしん」

国「善信」^{ヤシシ}

聖・正・万「善信」